



31  
555



始



31-555



鯉

新  
興  
文  
藝  
叢  
書

16



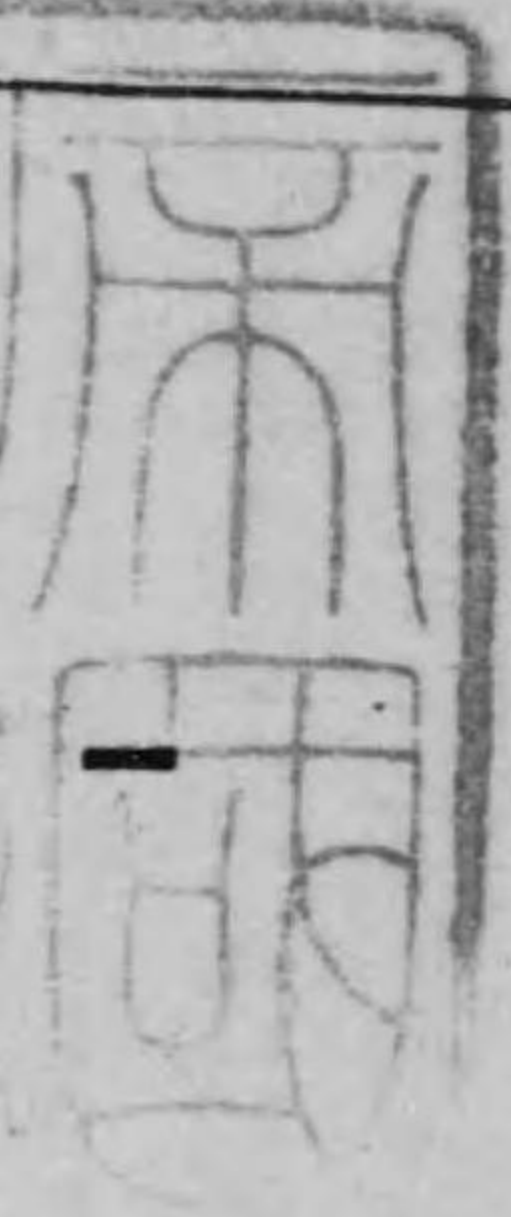
室  
生  
犀



京 東  
堂 陽 春

	鯉	一
	西洋人の話	四
	蝗	五
	弟子	三
	蠅	九
	尼寺を訪ふ	八
内	春と地上に住むもの	一四
	草枯れ	一六
容	行燈	一七
	カッレツと令嬢	一七
	藍いろの女	二二

鯉



加賀の城下には川師といふものがあつて、鮎や石斑魚のそれぞれの季節には、お城からのお聲がかかると、たいがいは三日間くらゐには揃へて尾頭を収めなければならなかつた。最も城下先を流れる犀川では谷屋の淵や大桑の淵などや、麻川の方面では岩屋と小橋との二つの淵がやはり禁漁になつてゐた。この二タ流れのかなりな幅のある川すぢは美しい水の質に富んでゐて、鮎などは越中の神通川や、また長良川のそれよりも香氣があり、ことに胃の苦味などが秀るといはれてゐた。

お川師村田佐助の家にお城からの使があつたのは六月三日の暑い朝で、三日間に

尺五寸の鯉を七尾動へてをさめるようとの事であつた。そればかりではなく、鯉の生づくりを鹽のまま膳部寮までとどけるようとの上意であつた。佐助は女關さきで両手をついたまま聞いてゐるが、腑に落ちかねるやうな顔をして使のものを眺めた。

「その鯉の生づくりとの御内意でございましたが、それは彼の洗ひの儀ではございませぬと思はれますが……。」

恐る恐るかう言つたが、洗ひでない生づくりといふものがあり得ようかと、不思議な氣がした。

「いや、生づくりは生づくりぢや、つまり生きてままで料理つて、鹽で泳がしたままとの御掟ぢや、唐には鯉魚洗味といふことがあつたさうぢや。」

結び立ての二十俵取りはかう言つて、さすがの強情ものの佐助も困つてゐるらしい日焼した眉に堅じは寄せたのを見て、靜かに微笑んだ。佐助は又恐れ入つたやうな恭恭しい口調で、

「お殿様のたつてのお望みで……。」

皆まで言はずに少し上目をしたとき、二十俵取りは

「さうぢや。托けても五日の節句には御入用とのことだ。」

「お受書」は晩方までに差出すやうにと言つた。佐助はそのとき衝立のかけに立ち竦んでゐる女房の足音を耳にいられた。そして直ぐ答へた。

「委細承知いたしました。御膳部様方によろしくお取次ぎ下されますよう。」

かう言つて彼は又頭をさけた。禿けた地が門から玄關までの明るい朝の光に、老人らしく光つた。垢のないよく洗はれた頭の地であつた。

「では間違ひのないやうにな。」

二十俵取りはかう言つて去つた。

佐助はうしろ姿を見送つてゐるが、すぐ座敷へ、縁側に端居しながらぼんやりと生簀のある泉水と、流れをひいた微かなせせらぎの音をきいた。かれは胸算川で生

簀に尺五の鯉が揃つてゐないこと、どうしても生簀のものをつかふわけに行かないこと、ことに生づくりには荒い水からあけてきたものでなければならぬことを考へた。

かなり廣くとつた庭のうちは、白い卯の花と篠竹の青い新葉とに染めあけてゐた。かれは立つて生簀のなかを調べようとして蓋をとつたが、けさは珍らしく白い腹をそらに見せて長い太い五年うなぎが一疋あがつてゐた。それを掴み出すと、もうからだに硬ばりが張つてゐて昨夜あたり浮いたものらしかつた。佐助は眉をしがめた。

「縁起でもない。滅多にみがないものまで上つて了つた。」

吃きながら非常に質のよい白味噌のかかつた五年うなぎを惜しさうにながめた。

女房のおしけがそのとき縁側に出てくると、

「まああがつたのでございますか。それだから、鑄、甚へおつかはしになつたらと此間

言つたぢやありませんか。」

卑しけな濁つた聲で言つた。佐助はしばらく黙つてゐた。

「こちらから頼んで買つて貰ふと、いやな氣もちがするからな。それはさうと、さつきお前は衝立のかけで立ち聞きをしたな。」

佐助は初老らしい聲音で、しかも鋭い鷹のやうな目でおしけをちよいと見た。

「いいえ。」

「うそ吐け、ちやんと見た。その話だがの、鯉の生づくりといふと家の鯉では間にあはないしな。」

さう言つておしけを見ると、おしけは、

「生きたままで怎うして料理れるものですかね。ひよつとすると、こんどはお前さんが遣りそこなふと、飛んでもないことになりはしないかと思ふんでございますよ。」

と言つて佐助の引受けたことを言ひなじるやうにした。

「おれにはおれの考へがあるのだ。」佐助は苦い煙草をぶうと吹いた。強情さうな荒い氣持が靜かにあらはれてゐた。

「お前さんがあんまり強情なものだから、面白半分で御掟が出るのですよ。川師はみんな引受けては代代お叱りを受けるぢやありませんか。」

おしげは刺刺と言ひ出すと、佐助はうるささうに頭をふつて、

「黙つてゐてくれ。おれにはちやんと考へがあるのだ。」

かれは又ぼんやりして煙草をふかした。煙草は濃い空氣のあひだにもつれて、昇りもせず散りもせずに漂つてゐた。それほど暑くるしい日になつた。

午後になると、佐助はぶらりと餌箱と手鎌をもつて家を出て、犀川べりを歩いて行つた。河原屋の格子さきで、

「おい居るか。おれだが……。」

佐助はいつもの仲間に聲をかけた。晝寢でもしてゐるらしく家のなかはしんとしてゐて、なかなか返事がなかつた。熱い積からの照りかへしと、背中にしみる日光にどつと汗ばみながら、

「おい。居ないのか。」と又聲をかけた。下駄は女房と二足、きたない格子のうちにあつたのを見澄してもう一度呼びかへすと、同時に女房のこゑで

「はい、ただいま……。」

しどろに言つて、二分ばかりして、若い女房が前垂れをしめながら慌てて出てきたのを見ると、胸さきが開かれて白いたわわな膚の地が見え、眞赤な顔がじとじとに汗ばんでゐた。

佐助はすぐにつこりした。と若い女房はまた椒らんで、

「えらい失禮をしました。ちよいとやすんで居ましたものでございますから……。」  
すこし震へごゑで言つた。佐助はそれでも眞面目なかほをして、



「河原屋にすこし話があるつて、さう言つて下さい。込み入つたな。」

佐助はさう言つて上がりかけると、三十に手のとどかないカッチリとした河原屋が、のつそり出てきたが、やはりぼつと賑くなつて、どぎまぎしながら、

「つい寝込んでしまつて済みません。どうか上つてお呉んなさい。」

かれはさう言つて佐助を座敷へ通した。狭い庭さきには投網や手ダモ、竹の柄のある長い釣竿などが束ねてよせかけてあつた。佐助はちらと片よせられた女枕の塗の赤いのを目にいった。そればかりでなく佐助の坐つた花蘆がうつすりとおたたまつてゐて、小鳥か何かをつかんだときのやうな温かさがした。

「實はお城から鯉をとのことだな。七疋揃へて呉れとの話ぢや。」

佐助はかういひながら、ぼんやり氣の抜けたやうな顔をしてゐる河原屋を、すこし憎らしくながめた。きつとだ……と佐助は脛のあたりのぬくとまりをもう一度こすりつけて見て言つた。

「へえ。七疋ですか。」と言つただけで、また茫乎してゐた。

「それでお前の方で半分ばかり捕つて貰ひたいのだが……。」

「ようございますとも、いづれ尺五くらゐの見當でござせう。」

「さうとも……。」

そこへ女房が冷水に赤砂糖をいれたのを持つて出てきた。河原屋は女房の方をむかないで、わざと俯向いてゐた。女房はへいぜいとは餘程へんに違つてそはそはして、

「お暑うございますので、お一つおあがりくださいませまし。」

茶碗を前のはうにすらせた。手がふるへてゐたのか、すこし冷水がこぼれた。女房はあわてて前垂で拭いた。そのとき佐助は何氣なく白い膝のあたまを、こりこりなものをふいと目にいった。

女房が去ると、河原屋はまた顔をあげたが、こんどは大分落ちついて言つた。

「ぢや、これから餌を掘りに行きなさんですか。」

「うむ。いい餌があればいいが、餌次第だからな。」

佐助はしかし生づくりのことは話さなかつた。間もなく立ちあがると、

「餌をとりに出かけようかな。」軽く欠伸をしながら言ふと、河原屋も「ぢや一緒に

参りませう。」と立ちあがつた。同じく竹の筒を持って、二人がそろつて出かけた。

出かけしなにちよいと女房の方をみるともう落ちついて、

「お静かに入つていらつしやいませ。」と手をついて言つた。

二人は河岸づたひに（その柳は暑さうに垂れてゐた。）法華寺<sup>ほっけやうじ</sup>へ出たのは、河原日向葵がすこしづつ西の方向きを移してゐるころであつた。

「今年の暑さは大へんだ。空梅雨で蒸し蒸ししてな。」佐助は妙にあたまの重いのを氣にしながら、まだ旺盛なからだの精力を今日はことに惱ましく感じた。あの室に變な匂ひもしたやうだ。こりこりな白い膝が張りきつて白い道路にうかんで見えた。

「砂がばかに乾いてゐる……。」河原屋は砂を掘りながら……ふと、佐助がいつになくむづかしい顔をしてゐることや、いつもとは變つたコダわりが二人の間にあるのを考へた。きつと感づいてゐるにちがひないと思つた。

積砂のなかに水いろをした毛蟲<sup>むし</sup>のやうな、ことごとく蟲といふのが住んでゐて、餌釣りにはなくてはならないものであつた。二人は黙つて一心に砂を掘りながら搜した。水氣ぐんで肥つた變な地むしで、おもに河原蓬<sup>かはらむす</sup>のかげのやうな砂を掘ると居た。

河原撫子<sup>かはらなでこ</sup>やよもぎや芹<sup>せり</sup>や、それから茨<sup>あざ</sup>のしけみなどに、きりきりきりきり……と蟋蟀<sup>せりふ</sup>が暑さうに啼いてゐて、人氣がするとばつたりと音いろを止めた。とおもふと向ひの方の繁みからまた涼しげな音いろが起つた。あたりは森として瀨なみを流れるおとが、さあさと米を磨ぐやうに遠いとこりにきこえた。

「お前の方は居るか。乾いてゐるので今日はすくない——。」

佐助のこゑが一叢<sup>たぐ</sup>へだてたところにおこつた。が高い雑草にさへぎられて姿がみ

えなかつた。

「こちらにも居ないやうだ。」

河原屋が別なことを考へてゐるやうな空聲でこたへた。熱い日にてらされて、淫らなましい目をしながら、しきりに變な身振りをしてゐた。

瀬すぢの風が涼しさをふくんでくるころまでに、やつと佐助は餌箱に半分ばかりのことと蟲を入れて、あつさうに額から汗ばんでゐた。河原屋もやはり同じほど捕つてゐた。むづむづした生きものが、蛆の湧いたやうに一合樽のやうななかで動いてゐた。

「そろそろ歸へらう。」

二人は河岸へあがると、日もだいぶ落ちかかつてゐて、瀬のいろがすこしづつ紅らんでゐた。

河原屋にわかれると佐助は家へかへつて、晩になると、ひとり何か考へこんで

ゐた。をりをり生簀の鯉がばつさりと跳ねるごとに、ぎつくりと佐助は太い眉をうごかした。

二

六月三日は雨であつた。四日の朝早くから佐助はでかけた。それは犀川の下流の落合といふ古い鯉の場ば場であつた。篠竹でからだの入れやうのない繁みに釣竿を持つて佐助は瘠せたからだを入れた。

午後の四時ごろまで三本ばかり釣りあげたが、そのうちの一本は尺足らずで、かれはそれを惜し氣もなく水に逃がしてやつて、場所を變へた。どろりとした蒼みある淵を選びあてると、一番大きい釣針をもちひ、そつと水のなかにいれた。御禁漁場だけに鯉の大きなのがあたりの静かさにつられて、ぼつかりと浮きあがつてゐた。王者のやうな紅い尾や鱗までがはつきりと見え、美しい目までがさやさやと目

にうつつてきた。

「あのくらゐの奴をあと二本ばかり釣り上げたいものだ。明日早朝お城にとどけなければならぬと思ふと、河原屋の方がうまくゆかないと、こちらは一本でもよけいに釣らなければならぬと、気が氣でなかつた。

水のいろもよかつたし、空の工合も、陰つた淵のくらみがかつた静まりやうも殆ど眺へ向きの首尾であつた。一服やつて山のはうを見ると、あすも晴れらしい山瀬おろしといふ風もでてきた。と、ぼつさり來た。竿はもちろん弓のやうになつたが、ものの三十分ばかり鯉がぐるぐる舞つてゐるのに引きずられるやうにして、なるべく鯉を疲らせるやうにした。水のなかを出刃庵丁のやうな光をみせて、ぐいぐいと廻つてゐた鯉は、だんだん疲れて鹽でも振られたやうに、だらりと佐助の手に掴まへられたときは、あと一時間で日がくれようとしたころであつた。

河原屋と釣り工合を打合すために、示野しものの橋まで行かねばならなかつた。しかた

なしに針を水に入れたままで、橋をさして出かけた。同じ時刻に河原屋は橋の袂で佐助を待つてゐた。

「三本だけ手に入れた——受取つてお呉んなさい。」

河原屋はかういふと、橋の欄干から吊し下げた尾籠を指さした。ぼつさりと跳つた大きな奴が三本入れてあつた。

「どうも御苦勞だつた。もうあと一本だから間違ひはなからう。」と言つて河原屋に別れることにした。

「いづれあとでな。」佐助は言つて胸のうちで算へた。

「いつでもようがす。ぢや折角。」と言つて河原屋は橋をわたつて行つた。

淵はすつかり沈みを見せ、暗みをわたらしたが竿はぴりつともしなかつた。白山連峰は藍いろにぼかさればじめた。

「もう一本だけだ。どうにかして上げなければならぬ。」

佐助は額をあぶらぐませながら、一心に淵を見つめてゐた。水全體がぬらぬらした大きい生きものにみえたほど、暮れはじめた。「何だ、小さいやつが……。」と呟やきながら見ると、鮎か、うぐいであらう。夕明りのする淵のきしの方を落ちつき澄して、列なつて泳いでゐた。それが焦りぎみの佐助には、あまりに落ちつき過ぎてゐて憎らしく見えた。

永い夏の日も刻刻にそのいろを變へ、刻刻にあたりをひつそりとさせ、刻刻に水の暗みと層とを増してゆくのであつた。お城下の古い森からかへる五位鷲のむれも、幾つらなりとなく啼いてはそのかけを水におとして行つた。さらさらする篠竹の音にも釣人はぎつくりして竿の手をゆるめなかつた。釣人にとつては一瞬間が全生涯をちぢめたほどの恐ろしい緊張された永く辛い時間であつた。限なくちからをこめられた一瞬間が、つぎからつぎへと消えて行つた。永い間の試煉された釣人としてのかれはそれでも慌てた様子が外からは見えなかつた。併しながら額のあぶらが變

になまりいろの光を帯びるほど烈しく透んできたのは、明らかにかれが内心のやきもきした氣もちを現はしてゐるのであつた。

「もう一本だけだ……。」かれはこんどは更に深みへ錘をうつした。靜かな水の輪が森とした水面におこつて、それがだんだんに擴がつて、岸の篠竹のしけみのあたりまで行つて消えた。

氣がつくと向河岸のつづいた田圃はもちろんのこと、もう眼が藍いろにくれた空氣に覆はれ、ちらちらするばかりで目の前の笹葉のかたちさへわからなくなつてきたのである。ただ水面だけがどんよりと鈍いいろに光つて、さかんに蝙蝠がつつ、と啼いては、ひらりと目の前をびつくりするほど近く掠めて行つた。それでも彼は動かなかつた。自分自身さへ闇のひとくれになり終つたとき、もう殆ど水のおもてがわからなかつた。

開け放つた座敷の行燈に火を入れ、二度目の蚊遣りを燻べたとき、やつと佐助は重い足どりで我が家へかへつた。いつもより遅いのでおしけは夫の顔色を讀みながら、手を拭き拭き出てきて、

「水加減はどうでござりましたか。いつもより遅いので心配しましたが……。」

さう言ひながら金底の尻籠を覗き込んだ。佐助はつかれたやうな聲で、

「数だけはまとめた。ああ草臥れてしまつた。」さう言つてまた「手燭を持ってきて呉れんか。」

佐助は草鞋を脱ぎ棄てて足を洗ふと、縁側へあがつた。「すぐ飯にな。」と言つて、いつものお定りの一本をつけさせた。

おしけは何處か言ひたいことを言はないでゐるやうな佐助の、沈んだ顔を見い見

いしたが、

「鯉の水を代へてやりませうか。まだお歸りになつてから代へないんぢやありませんか。」

おしけは若しや数が合はないのではないかと、それをしらべようと、水のことを言つたが、佐助は手で止めた。

「水は飯がすんでから代へよう。そのままにして置く方がいい。」

おしけはすぐ黙つて盃についだ。酒もいつもなら一本つけるようにと、首尾のい漁のときはいふのだが、苦さうに最後の盃をぐつと呷ると飯にした。

庭にもう夜涼が下りて、蟲があちらこちらにすだきはじめた。青い足をした蟲が、いくつも灯について座敷へとびこんで、ぱつたり行燈につきあたつてはかすかに疊を叩いた。

「早いものでござりますね。」

おしげは取つて付けたやうにいふと、佐助は一服やりながら、

「ふむ、すぐ秋だな」と鼻のさきでいふやうに別なことを考へ込んでゐた。

女房が勝手へ行つたあとで、佐助は庭へ出ると、目勘定で尾籠の鯉をはかつたが、尺五のやつが六本しかるなかつた。こんどは生簀の分をしらべた。みな尺足らずで、今日捕つてきた分にくらべると、平つたい鮒のやうに小さく瘦せこんでゐた。

「間にあはない。こまつたことになつてしまつた。」

と、その鮒のやうなのを殆ど投げ込むやうに入れると、がつちりと蓋をした。尾籠の鯉は夜目にも一層黒く、一層活きを強め、暗い星あかりのする夜ぞらのしたで、しきりにばちやばちや跳つた。とばかりが冷たく素足にふれた。

「一本足りなくとも恥だ。」佐助は百萬石の川師として帯刀まで許されてゐる自分が、もう夕方淵にゐるときから、恐らくそのすつとさきから、まやかしの多いことを知つてゐるが、けふは殊に心寂しくかんじてゐた。なにしろさきは生きものだ。

小さくても自由な生きものだからさう甘く數を揃へるわけにゆかない……とも考へたが、明日といふ間にあはないことが、ぞくぞく胸を酸ばく氣をあせらせた。

ゆきつけの料理屋の生簀も考へたが、この歳とお川師の名に於ても、ことに一本くらの鯉をかりにゆくことができなかつた。佐助は縁側へ腰をおろすと、くらしい夜ぞらをながめた。それがいつも夕方の淵の静まり方や深く暗みをおびたのと能く似てゐた。ちらちらする星屑までが、森とした淵のありさまをそつくり浮ばせた。ふしぎな水の色合ひを讀みわける目をもつなれば、夜ぞらにありありと黒い生きもの……ことに足りない一本の鯉を目に描きはじめた。それは鯉によくするやうに澄み泳いで、尾も鰭もしやんとして、鳶のやうにすまし込んで見えた。

それからまた代代のお城主の前田が、いつも川師が揃へものをさめきれないと、生涯その川仕事をさせない壓制を敢てすることをも考へた。先代の川師も失敗つて、川仕事を禁められて、しまひにはお城下さきのゴミ箱をあさるまで零落してしまつ

た。

「そしてあのお殿様は鯉の値ぎりをするケチなお殿様だ。」とも考へた。百萬石などと言ふが、百姓はことに不味い加賀米に十分な肥料もやることができなほど、わるい米をつくつてゐるのだ。蒼白くふらふらした百姓から掠め取つてゐるやうな城主のことも考へられた。

佐助はいろいろなことを考へた。しかしさしあたり鯉の足りない一本のことが、どうしてもよい方法が立たなかつた。かれはぼんやりと何時までも庭さきに佇んでゐるが、そのとき何を考へたか、佐助の窪んだ頬のあたりに皮肉な冷たい微笑が、しづかに浮みあがると、また靜かに消えた。佐助は御箱から一疋のことと蟲を取り出すと、大きな銀針に刺しこんで四五間ばかりの釣糸を手早く手拭のさきに包んで、門の植込のなかに、人目にたたないやうに隠しておいて、

「ちよいと出かけて来る。すぐ歸へるがお前はさきに寢てゐてくれ。」

さう言つてかれは出かけようとした。

「晝間のおつかれもあるのに今頃どこへ御出かけなんぞござりますの。」

おしけは不審さうに言つたが、「いや河原屋にけふの鯉の分け前をしてやらなければならぬから。」と言つて出かけた。出かけしなに先刻隠しておいた釣糸をつつんだ手拭を取ると、懷中に振ちこんでふらりと門を出た。

あとでおしけはしばらく頭をかしけてゐるが、すぐ氣がついて尾籠をしらべた。そのなかには六尾しか尺五がゐなかつた。おしけはすぐ謎がとけたやうな顔をしたが、ばちやばちや跳ねたためにそこらに水が飛んだのを、下駄でこすりつけて夫がかへつてきても氣附かないやうにして置いた。

「とするとあのひとは今ごろ何處へ行つたのだらう。河原屋だと言つたが、もう寢てしまつてゐるにちがひない。」女房は行燈のかけで縫ひものをはじめた。寢てはならないやうな氣がしたのであつた。



尾山城のまはりには深い濠をもつて圍まれてゐて、町のものは百間堀と言つて、そこから牛のやうなえもりがよくお庭さきへ深夜になるとの、このこと上つてくると言はれてゐたほど、古い濠であつた。

その濠の水の捌けぐちから、殆ど垣にべつたりと吸ひつくやうにして動いた影が、永い間ひとところになつてゐた。無事だ水面や石垣の暗みと殆ど同じい色になつて見えて、ただときどき炭のやうにその影が動いてゐた。そこから城の高い石垣の上に繁つた松や榎の眞黒なかたまりが、夜風にしづかな森よとした鳴りを立ててゐた。

黒い影にした長い糸を呼吸をつめてしばらく引くやうにしてゐるが、間もなく、ばつさりと大きな光つたものを釣りあげた。かれはいち早くその跳ねるものを手拭

で巻くと、川意の風呂敷につつんだ。その水門から土手になつてゐて、土手からすぐ道路へ出られた。びつたりとからだを雑草の間にひそめた黒い影は、あとさきに人通りも途絶えた亥の時の火廻り番を、遠く大手門のあたりを歩いてゐるらしく聞いて、のつそりと立ちあがつた。誰だか背後から影のやうなものが追つてくるやうな氣がして、かれは道をいそいだ。ときどき風呂敷のなかの生きものは、その強い跳ねやうをばさばさやつてゐた。

かれは廣坂の通りを出ると、片町を裏古寺町へ折れ、さうして長町の家についた。そのとき黒い影は佐助であることがすぐ分つたが、いつもよりづつと蒼白い惱んだやうな、せかせかと荒い呼吸ぎれをしてゐた。かれはすぐ庭へ廻ると、尾籠のなかへ鯉を入れた。新しい動搖がその尾籠のなかで起つて、はねくりかへる水音が靜かなあたりにひびいた。

おしけは見て見ぬふりをして、

「おかへりなさいませ。たいへん鯉が跳ねてるぢやありませんか。」  
おしけは浮んでくる微笑みをひとりで押へた。佐助は、

「ふむ。おれの足音がしたから驚いたのだらう。」

縁側へあがると、おしけは佐助のからだに夜霧にびつしよりと濡れて、ところどころ古い石苔の青い藻のやうなものが喰付いたのを見たとき、突然に顔いろを變へた。佐助もすぐにそれを感じくと、

「着換へを持つてきて呉れ。」

荒い嚴めしい調子で言つたとき、明らかな憐忍にちかい變なきらきらした表情になつてゐるのをおしけが見た。これまでも能く變なことがあつたが、さういふとき平常とはすつかり變貌してしまふ癖のある夫をよく知つてゐたので、黙つて着換へを持つてきた。脱ぎ棄てられた着ものを持つて次の間の行燈にさしつけて見ると、びつくりして震へあがつた。それは古い石苔に擦れたあとで、石苔はお濠より外に

は生えてゐないからである。

「やつぱり然うだ。しかしいい鹽梅に知れてくれなければいいが……。」

おしけはかう考へてゐたとき、座敷から夫のこゑで、

「酒をもつてきてくれ。熱くしてな。」

がつかりした聲をきくと

「すぐおつけいたします。」さう言つておしけは勝手に立つて行つた。

佐助の額はあきらかな荒荒しい蒼白さと、一種の慄へるやうな氣振りとでガチガチしてゐた。これで甘くゆけばいいのだ。どつちにしてもたつた一本だけ融通したのだ。——さう思つたとき、いまから十年前にも今夜のやうにお濠に糸を垂けたことがあつたのを思ひ出した。おれは別にしよつちうお濠から釣るわけではないのだ。足りない分だけだ。さう思つてかれはやや氣を安んじた。夜は更けて涼しさが冷たさに變りつつあつた。

佐助はぐいぐい飲んだ。むんづりして黙つてゐる影が、すこしも動かないほど凝然としてゐた。おしけは酌をしいしいこれも黙つてなるべく夫のかほを見ないやうにしてゐた。佐助もなるべく妻の方を見ないやうにしてゐたが、だんだん自分のして来たことを繰り返しては考へた。川師などと言つたつて皆交代おれのやうなことをやるのだ。膳部寮の役人にしろ皆問屋と同じ蟻の穴を掘つてゐるのだ。さう考へては安心をして見たが、やはり處もあらうにお濠へ糸を垂れたことが、非人の仕事のやうに思はれて心外であつた。——そのとき、どういふものか、ふと昨日河原屋をたづねたとき、河原屋の女房の白い膝を見たことをおもひ出した。井どんまりの底ほどある大きな膝がしらだ。さう思ひながらちらと妻の方をみたとき、やつぱり膝だけを目にいられた。おしけはふとつてゐた。——佐助はこのとき非常にからだの疲れてゐることに気がつき、河漁に出て行つて疲れたあとに奇妙に起りやすい情感をいまでもまた感じ出したのであつた。

「あんな厭なことは考へたくない。それよりも……」佐助は年をとつてゐるが、まだ衰へないでゐて、この觀念に辿りついたとき先刻からいくら飲んでも廻らなかつた酔が、いちどに目にさし込んできた、からだもいゝ鹽梅にほかほかと熱くなつてきたのである。さうして彼はうつとりした目をあけると、おしけはそれをしつかり喰ひ止めるやうな目をした。が、佐助は笑つて、

「遅いからねよう。あゝ草臥れてしまつた。」

と、行燈のかけに長長と寝そべつた。おしけもすぐそれと気がつくつと、優しい聲で、

「もうお酒はいいんですか。」と言つた。

「うむ……。」

佐助は答へたがすぐ例のうつとりした目をおしけの膝のあたりにそそいだ。おしけはそれを蚊帳を釣りながら偷み見た。

## 五

六月五日は空梅雨で、見事に晴れぬいてゐて、武士町の裏堀あたりでしきりに杏の熟れた高い匂ひや青梅賣の呼聲がした。お城の下通りの大手さきを佐助は鯉をいれた平盥を天びんでかついで、汗をふきふき歩いて行つた。朝掃あさばきのすんだ裏門で「通用門勝手」と書いた木札を見せてから、膳部寮までのお弓藏の裏どほりを行つた。

晴れて五位がしきりに啼いてゐた。

膳部寮の裏井戸のところで荷をおろしたかれは、すぐに鯉の闊見を乞うた。——いつになく白壁塗りの建物がいかめしく映つてきて、その建物のあちこちを仲間ちゅうけんどもが歩いてゐるのも、今朝はいかめしく見られた。わけもなく、自分が町人でありながら、かういふお城に出入りすることを誇らしくかんじたが、すぐに昨夜のこと

がふと頭にうかんで、ひいやりとした。佐助はいつもとは疲れたやうなところがあり、初老に入つたらしい様子とはなかつたが、特に氣のつくのはおどおどしてゐることであつた。

闊見役が來ると、すぐ盥のなかを覗いて、手で大きなぬらしたのに觸れて見たりして、

「いや中中見事な鯉だ。これなればお氣に召すことであらう。」

と、ばつさり跳ねた飛沫で濡れた袴を手ではたいた。

「お日取りがすくないので、すこし手間をとりました。」

佐助はかう言つて闊見役の目をちつと讀みこんだが、すぐ安堵したらしい弛んだかほをした。

「さうだらう。これだけのものを揃へることは中中骨ぢや。やはりお前でなければ勤まらぬ役ぢや。」

さう言つて又手をふれたが、

「水を代へてやつたらどうぢや、たいへん水垢を吐いてゐるやうぢやから。」

「え。水を代へませう。」

佐助はすぐ井戸から水を汲んで、鹽の分と代へてから間もなく、一尾の鯉の肌がやや白い晒されたやうな、變な、ぞくにいふあざのやうな班點ができてきた。

「はてな。この鯉のいろが變つたのはどうしたわけだらうの。」

閱見役はかう言つてぢつと目を凝らしたが、佐助はみるまに顔いろを變へた。が、すぐ狡さうに笑つて、

「つまり鯉の種類がちがふのでござせう。水が變つたものでござりますから……。」

佐助はときどきした胸をおさへるやうにして言つた。

「さうかの。これ一尾が變色するといふことはをかしいことだ。」

「よくあることに聞いて居ります。仲間どもからも……。」

佐助はかう言つたとき、閱見役は特に何も考へてゐないらしく、

「では一つ生づくりの方をやつてもらひたい。料理番へ廻つて貰はう。」

佐助はまた荷をかついで、料理番の方へ廻つた。そこに誰が飼つてゐるといふこともない一疋の白いむく犬がゐて、佐助にもなついてゐた。しきりに鹽のなかを覗き込んでクンクンさせてゐるが、ふしぎに變色した鯉をねらつてゐるやうで、うすきみ悪く佐助は幾ども追ひやつた。

料理頭が出てきて、

「や、御苦勞。一粒選りだな。だがどうして色が變つてゐるのだ。こいつは。」

と言つて掴み出したが、

「さむ。これは古い水で育つた奴だな。さうだらう佐助。」

かう言つた料理番の前では、佐助はちよいと顔を赤くしたが、

「すこし昔の込んだところで釣つたのだ。間にあはなくてな。」

「さうか。しかし此奴はものになるまい。弱つてゐるから。」

かう言つてもとの鹽の水へかへした。佐助は料理番の目色をぢつと讀み込んでゐたが、しかし通るには通るだらう。數があつてゐるからと、膽をすゑて一服やつた。料理番はしやがんでかなり長い間見めてゐたが、そのとき明らかかな疑惑的な光をもつた目で、じろりと佐助を見つめた。

「尾を見なさい。水苔がくつついてゐる。お蔭の鯉みたいにな。」

かう言はれたとき、偶然に料理番が言つたのであらうと思つたが、ぎつくりして脇のしたを冷たくした。が、

「うむ。古い池の捌け口で釣つたのだから水苔がついてゐるのだらう。」

「さうかい。最も鯉にはよくある苔だからな。」

料理番はそれつきり黙つたが、佐助はすかさず、

「近いうちに一杯やりたいが来て呉れるかの。」とちらと顔をみてかすれたやうな聲

で言つた。

料理番はむづかしい顔をしたが、

「久しぶりだからそのうち行くとしよう。ぢや、たしかに鯉は受取つたぜ。」

意味ありけに言つたとき、佐助はほつとして思はずごつつりと喉をならした。

「何分よろしくな。それから生づくりの方はかういふ風にするのだ。」

佐助はかう言つて、その料理る手だてをはじめ出した。料理番はすぐ佐助を室のなかへ入れた。

井戸からひいた噴井があつて、もう新しい俎や庖丁、新しい手巾など、それから新木の鹽も用意してあつた。佐助はそこへ入る前からだを清水で拭いて、かほもあらつた。さうするのが規則になつてゐたからである。

かれは鯉を俎の上にそつとねかすと、ぱつくりと、息をした生きものは、べつに跳ねも躍りもしないでちつとしてゐた。かれは、その頭から脊すぢへかけ、三四寸

ばかり鱗をつけたまま、鋭い庖丁で皮を小氣味よく引くと、鯉はばつちりと尾で狙をたたいたが、おさへられてゐるので動けなかつた。ひいた皮をそつと剝ぐと、白い肉の地が桃いろをまぜてあらはれたのを手早く細かいきれ目を入れた。そしてまた皮をもとのままに食附けて、三針ほど縫ふと、そつと一疋だけ一つの鹽のなかに入れると、鯉はさきのやうに平氣でしづかに泳いでゐた。ちやうど皮をひかれない前のやうな澄しやうをして――。

かれは次から次へと、みな一と皮だけ剝いで刻みを皮の地に入れた。それはもう箸さへつけければ、すぐ洗ひと同じものになつてゐたのである。料理番は感心してみてるたが、れいの變色してゐた鯉は、佐助がれいの庖丁を加へてから水に泳がすと、間もなく、ふらふらとした。佐助はひいやりとしたが、もう見てゐるうちに、白い腹をそらにむけて浮いてしまつた。

「荒水にそだつたやつでなければ駄目なんだな。」

料理番が腕をこまねいて言つたとき、びりびりと震へた鯉はおびたらしい泥を吐いて水を濁した。

「いけない。此奴は――。」と料理番は摘み出して、骨棄箱にばつさりと投げつけた。洗濯でもしてゐるやうな音がした。佐助はその白い腹と、ひと皮を敷かされた背なからちつと見つめたとき、料理番がもう感づいてゐるかもしれないと、料理番のかほを見ないやうにしてゐた。

そのとき下水の捌けぐちから、白いものがちらちら動いた。とみるとそれは白いむく犬で、鼻をくんくんさせながら、しつこく下水口から何かを嗅ぎあてようとしてゐるのであつた。

「佐助や。けふは歸つた方がいいぜ。しかしおれはもうちやんと解つたのだ。だが、おれとお前とは殺生仲間だから何も言ふまい。」

料理番は苦み走つた顔で、すこし年上の佐助の顔をみないやうにして言つた。ど

うしても判ることなんだ。しかし長居はわるい。佐助はかう考へると、

「何もいはない。よろしく頼む。著録する歳でもないが……。」

「ぢや、さよなら。」

料理番は鹽の鯉を一つづつ眺めながら、さう言ひ棄てたとき、佐助はさきの通りのいかめしい白い建物をながめながら、眞青なかほをしながら歩いて行つた。氣のせいか背後から呼びかけられたやうな氣がして幾度もふりかへつたが、誰も呼んでゐなかつた。ただ例の白いむく犬がちよろちよろと後をついてきて離れなかつた。その白いのが妙に寂しかつた。あまりにあたりの明るいのに心がひかれて、誰もかも昨夜のことを知りぬいてゐるやうで、がつくりして門札を見せると、ふらふら暑い大手さきの通りへ出て行つた。通りは白く光のなかに眩しく目を射りつけた。

## 西洋人の話



上

もう四五年前の或る曇まじりの寒い晩のことである。

銀座の賑やかな通りが新橋を境目として、きふに暗みがかつた凍つてた暗い通りへつづく角のカフェエで、私はストオヴにあたりながら、寒さしのぎの酒をちびちび飲んでゐた。硝子窓のそとは、たえ間もない氷雨のやうな曇が、磔石をびしやびしや叩いてゐて、その冷たい雨が外套を通して、肌寒くおそうてゐた。客は私と商人體の男一人で、もう十一時近かつた。

そのときドアを開けて、せいの低い西洋人が一人這入つてきたが、ボォイに目も

くれないで、すぐ私の卓<sup>チエツル</sup>の方にちかづいてきた。うすいオバコオトも日本へきてから、古着屋あたりで買ったものらしく、肘が抜けて色も褪めてゐた。どこか狗のやうな杓れた顔をしてゐた。顔色は蒼ざめてゐた。妙にセルロイドのやうな光をもつた目つきは、あきらかに酒氣のあることを感じさせた。

「わたし、横濱までかへるんですから汽車賃を借して下さい。」かれは棒立になつたまま、その茶色の帽子をとると、幾度もおじぎをしながら言つた。私はかれが室へはひつてきてまだ一分も経たないうちに、かう切り出したので、鳥渡の間ぼんやりとかれの顔を凝視めたままである。

さつきから見えてゐたボオイは、そのとき直ぐ私の卓<sup>チエツル</sup>のそばへやつてくると、

「駄目ですよ。いつも同じことばかり言つたつて——。」といくらか外国人だといふので遠慮深く言つたが、充分な侮辱が含まれてゐた。西洋人はさう言はれた咄嗟に、ポケットから十錢銀貨をつまみ出すと、テエブルの上に鏗然と投げ出した。そして

素早い場馴れのした怪けな目つきで、見下ろすやうにボオイをながめると、

「ビールを一杯。」と言つて、くるりと背中を向けて、私の正面の椅子に腰をおろした。そして私の顔をじろじろ見つめたが、

「實際、困つてゐるのです。横濱までゆけば友人も澤山ゐるんですから、汽車賃を五十錢借して下さい。」と言ひながら、私の目いろを読みこんだ。私は何氣なく、ぼんやりと微笑んだのである。その日も、何の用事もなく、また下宿にちつと落着いてゐられるやうな境遇でなかつたのである。誰でも、ひとりものが的度もなく寒い晩にうろつくやうに、私も犬のやうにうろついてゐたのであつた。

「さうですか。五十錢でいいんですか。」私は覺束ないポケットを手捜りに、一枚の銀貨を取り出すと、かれの手のひらにそつと置いた。

「どうも濟みません。」と言つて「横濱まで行けば出来るんです。」と仕方なしに、ぶりぶりしながらビールを持つてきたボオイを、じろりと上目でながめて、銀貨をす

ぐポケットにしまひ込んだ。

帳場の方へ引きかへしたボオイは、右の手を自分の鼻さきでひらひらさせて、その男と相手にならない方がいいといふ様に、片目を閉ちて鼻つまみをして見せた。その白い服と卑しげな手まねを目にいれると、私は西洋人の顔を復ちらりと見た。かれは自分で注文したのをぐいと唾つてしまふと、私の言ひ附けたのを黙つて飲み出した。「このカフェエは不親切ですよ。外国人だと思つてばかにしますよ。」と言つて、はじめて皮肉らしく微笑つた。かれはアメリカ人であつた。

「そんなことはないんでせうが、それにしても横濱へ行くのなら、もう出かけないと十一時すぎですよ。」

といふと、あはてて「ありがたう。ぢや失禮します。」と流暢な日本語で言つて、立ちあがると、すぐドアのそとへ出て行つた。ドアが開かれたとき、寒い水氣のある風がさつと吹き込んで、雲の音がびしやびしやしてゐた。

ボオイは私のそばへやつてきた。

「あいつは彼麼ことばかりしてゐるんですよ。毎晩やつてきてお客様から五十錢づつ貰つてゆくんです。断らうと思ふと、ビールを一杯注文されるもんですから仕方がないんです。」

と、かれは「どうも濟みません。」と自分で謝まつて、まるで自分の罪でもあるやうな顔をしてゐた。

「しよつちう來るのかね。」といふと、

「あなたもお歸りにはきつとお會ひなさるかも知れません。貰つただけをすつかりハタいて了ふんです。そこらのカフェエで今頃飲んでゐるでせう。」

と憎らしさうに言つて帳場の方へ行つた。

そこを出ると、私は外套の襟を立てて、ななめに先のやうな冷たい雲に吹かれながら、彼處此處で店をしまひかけた人道を歩いて行つた。七年もバリエにゐた人が

歸つてきて、あるとき私に「あつちでしまひに貧乏してしまひましてね。バナナが安かつたものですから、毎日バナナばかりを食べてるましたよ。」と言つたことを何気なく思ひ出した。外國で困つたらどうにもならないだらうと、私はそのとき私の貧乏ぐららしぐらる何んだといふ氣で、すこし勇氣をかんじながら歩いて行つた。

雲はますますひどくなつて、しまひには、ソフトの前庇をおろしたが、それでも目鏡がすつかり濡れてしまつて、二タ側の街燈の光が變に鋭どく舐ぎすまされて、目鏡の露に反射してきた。尾張町の交叉點までゆくと、電車を待つ人人もすくなかつた。不意に、ライオンのドアから迂り出た男があつたので、ちらと見ると、さつきの西洋人であつた。かれは斜めに雲に射込まれたやうに立ちすくんだが、それでも、すぐ鰐石へ歩き出した。ふらふらしてゐるが、きふに立ち止まると、そこに立つてゐた洋服をきた男と何か話し出しはじめた。「また彼の手だな。」と、私は厭な氣がした。「どつちにしても同じだ。」といふやうな氣がして見てゐると、その服をきた

男は、ポケットから幾千かを與へると、かれは、れいのびよこびよこ頭を下けて、もと来た方へかへつて行つた。ふらふらした歩きぶり、その影は濡れた鰐石の上になちんだり伸びたりしながら行つた。私は寒さをなほ一層にかんじながら、街燈にななめに降つて消える雲を茫然と見送つてゐた。

下

夏になると、私は鮎がたべたくなるごとに松本樓へよくでかけた。ひとつは涼しい木立にかこまれた雑鬧のなかで、なぜか彼の涼しいすんなりした鮎の肌をつつくことが好きであつたからである。ことに松本樓の露臺の上になると、電車や自動車の響が、木立の葉がくれを潜つて、どちらかと云へば緑ぐんだ氣持ちのよい音響となつてくるのである。さういへば詩人の寢言のやうにきこえるが、實際に於て鮎の鹽の味は、ああいふところで味ふのが非常にすきであつた。

ことに鮎といふ魚は、黒子の浮いてゐるやうな背中が、何ともいへない好ましい美しい食欲と、それに不思議な肉慾をかんじさせてくれるのであつた。背なかの鱗が焦けて、かんばしくカリカリしてゐるのと、妙に、あそこに黒子があるやうな氣がするのである。私はそれをむしりながら、冷たいビールを一口づつやつて、ひるまの仕事のつかれをなほしに出かけるのであつた。

ここでは不思議に西洋人の客が、夕方からよく出會すことがあつた。夫婦づれなどが、睦まじけに腕を輪に組んで、夏の晩着に白いすべすべした肌を露き出して、そよそよとスカートを夕風になぶらして這入つてくる姿は、西洋人の好きな私をいつもほれぼれさせるのであつた。まるで活動寫眞の映畫から抜け出てきたやうなこれらの幾組かが、私の行くごとに、どのテーブルかを占めてゐないことはなかつた。そのうちでも、ふしぎに三度ばかり、まだ二十を越したくらの、なりの高い恐ろしい位大きなからだに長い足をもつた西洋人が、晩がたから女だてらによく一人

でやつたくるのに出會した。ある晩、かの女がいつものやうに腰かけてゐる斜めにこれも一人の若い西洋人がゐるが、兩方からいつとなしに話しこんで、西洋人らしく、手眞似をやつて話してゐたりした。女はVの字の高をつめてしまつたやうな唇をしてゐて、鼻から頬にかけて八字のしはがよるほど肥え、そのうへ、うつすりと櫻いろをしてゐた。目にはたえず空目をつかふので、強烈なあぶらぐんだ魅力をふくんで、微笑ふごとにぶちんと破れるやうな微妙な表情のみが發散する或る感情をあらはしてゐた。どこか淫蕪な Mabel normand のやうな甘い目つきをしてゐるかと思ふと、それが Mray Keene の蝗のやうに變化りやすい唇つきによつて、屢屢男のおもてにそそがれてゐた。

かれらは何か話しては微笑ひ、そうしてはからだを揺ぶつてゐた。明らかに女がどういふ階級のものであるかがわかつたころは、彼女が男の指輪をいぢくり廻してゐるときに私はもう感じてゐたのである。

男は白金らしい指輪を抜いて、彼女にみせたが、彼女はそれをちよいと匂ひを臭ぐやうにして、自分の中指にはめたが、太つてゐるために上手くはまらなかつたのである。そのため彼等はまた笑ひ出した。

「あの女は、ひよつとすると危ない女だ、へんに會ふことにほんやり来て座つてゐると思つたのだ。」私はその女がその男と話してゐるのにも、ときどき、私や他の客の方をしきりに見るとはなしに注視してゐることに氣がついた。

そのうちに彼女は何か言ひながら、足もとを見ながら、靴の紐を結んで見せたが、その男が何か戯談らしくいふと、彼女は、びつくりする位素早くスカートを捲つて、長い足をすらりと露き出しにした。男は窒息しさうな顔をして微笑つたが、彼女はすぐスカートをおろした。

そのうち彼等はしばらく喋つてゐたが、テエブルの下では、小さいきやしやな女靴が、蠶豆のやうに柔らかく、大きな赤靴の下敷にされてゐた。そこは薄暗かつた

が、私の方からは、むづむづ動くかけが、白い卓布の下からゆつくり眺められた。かれらはコオヒと菓子を食べたてしまふと、二人はすぐ腕を組んででかけた。女は大きな麥藁帽の上からピンを刺したのをあみだに、ほつそりと、踵ばかりで歩くやうな奈如にも散歩するらしい歩き振りをして出て行つた。そのとき氣をつけてみると、れいのプラチナの指輪が女の方にはめられてゐて、まだ男に返つてなかつた。

その日から一週間ほど後に、彼女だけが退屈けに Theatre Magazine などをつらいて讀んでゐたが、外國人が入つてくるごとに慵けな、うつとりするやうな目つきをして秋波を送つてゐた。そのとき私は何氣なく彼女の中指にプラチナの指輪が、あの日から依然として穿められてゐるらしいのが、きらりとその頁をくるときに光つたのを見たので、ひとりで微笑まれた。それに卓の上におかれた鱈皮のオペラバツクが大分すりへらされてゐるのを見たとき、へんにこの女が寂しく見えたのである。

蝗 (548)

蝗の一 さむいな

蝗の二 うん。さむい。

蝗の三 飛べるか。

蝗の四 半分ばかりしか飛べない。

蝗の五 みんな朝のうちは潜んでる。あたたかくなつたら這ひ出せ。

.....

蝗の一 白い道路がひかり出てきたやうだ。道理であつたかくなり出した。

蝗の二 車があぶないぞ。大きなやつがぐるぐる廻るのを見ると、あたまが痛んでくる。

蝗の三 お前のあたままで變に埃つぼくなつてゐるね。

蝗の四 道路のそばにゐると、いつも白つぼくなるんだ。

蝗の三 洗つたらいいだらう。



蝗の四 洗つてもおちないんだよ。こちらにあぶらがなくなつてきてゐるから。  
 蝗の三 道理でからだもよごれてゐるな。

蝗の四 お前ののもひどく汚れてゐるよ。おれのことばかりを言ふな。

蝗の三 だつてお前ののはひどく破れてゐる。羽を合してみる。

蝗の四 うん。いやなばさばさした音だ。聞いたか。

蝗の五 たしかに聞いた。いやな音だ。

.....

蝗の一 さむいな。

蝗の六 うん。こたへる。

蝗の一 どうして跋をひいてゐるのかね。まだ脛を落すには早いが……。

蝗の六 いや。北側の草場は全部こゝ四五日の霜でやられた。たいがい大足を一本落してしまつたよ。

蝗の一 北側の霜はひどいからね。

蝗の六 こちらはまだかい。

蝗の一 まだみな大足をもつてゐるよ。しかし飛べなくなつた。

蝗の二 さうだらう。もう飛んでゐる奴を見たことがない。

蝗の六 來年はまた會へるかな。

蝗の一 わからないな。このまま來年までおれたちの仲間がのこるものかどうかな。

蝗の六 遺るには遺るよ。しかしおれたちの氣持をつたへておくことができない。

さういふ機械がないから。

.....

蝗の一 さむい。

蝗の二 ……。

蝗の三 今夜あたりやられるらしいな。

蝗の四 昨夜の模様だとね。からだのふしぶしの痛むことと言つたら話にならないぞくぞくする。

蝗の五 おれもぞくぞくする。

蝗の六 ……。

蝗の一 北側からすこしも音がしないな。ひよつとしたら、みんなやられたらしいな。

蝗の三 見にゆかうか。

蝗の四 止せ。つまらないから。それに行きついても歸れはしないよ。よぼよぼしてゐては。

蝗の三 それもさうだね。だが可哀さうだ。

蝗の一 今夜は用心をしろよ。

蝗の三 うん。

蝗の一 ちつとしてゐるんだぞ。藻掻くとやられるぞ。腹を地べたにあててゐる。

ぼろぼろな泥にな。

蝗の四 うん。

……………

蝗の一 ……。

蝗の三 ……。

蝗の六 みんなやられたかな。うむ、君はまだ居たのか。

蝗の五 恐ろしくいやな氣持だ。みんなやられたな。

蝗の六 おれとお前ばかりになつてしまつた。お前のうしろに影がつきまどつてゐるぞ。

蝗の五 お前にもあるぞ。歩けるかいちよつとでも。

蝗の六 歩いてみようといふ氣が起らない。これはふしぎだ。

蝗の五 おれはまるつきりからだの重さも軽さもかんじない。お前の顔だけしか見え  
ない。

蝗の六 今夜はあぶないぞ。用心しろ。

蝗の五 お前も用心しろ。

弟  
子

何時のころとなく古い柴折戸に「蕉風」といふ名札が、雨や風にさらされて、墨の色も剥けかかつたまま掛けられてあつた。さういふ俳諧師は古い城下町だけに、このごろでも裏町の落葉に埋まつた家などに、ふいに見かけることがあるのである。

蕉風はもう七十を越えて、反古籠のやうに瘦せこんでゐたが、それでも、一人で銭湯にも出かけてゐたし、庭も掃いたりしてゐた。月の十五日前には、いろいろな町のひとが、五句吟を半紙に淨書しては届けると、蕉風は、それを綴り合せて、「蕉風會十逸選」とかいて、一冊にまとめ、その上、點取りを發表してゐた。蝶がたの印や、舟のやうなのや、なかには矢のやうな印などを捺してあつたりしてあつた。

床屋、銀行員、菓子屋の主人、または中學の先生などが居た。その句吟と一しよに一人前二十錢づつ收めることになつてゐた。

蕉風庵十逸は、夏がすぎると、すぐに炬燵にかじりついて寒がつたが、子息の嫁のお半は、その炭火も充分にやらなかつたらしく、蕉風はひとりで炭火を移しながら

ら掛布團の始末まで自分でやつてゐた。

「お茶を半斤ばかりくださらんか。なるべく佳いところを……。」

蕉風は、お湯のかへりには茶を買つてゐたが、茶屋のおかみさんが、おしやべりらしく、

「昨日お半さんが買つていらつしたばかりですのに、もう無くなつたんですか。」とふしぎさうに云ふと、蕉風は、しまりのない顎をくにやくにやさせて、

「いいえ。嫁とは世帯がべつなものですからの。やかましく言はれるより、自分で買つた方がいいと思ひましてな。」別に怨みがありませんい口ぶりもしないで、ひとひの善ささうに微笑ふのであつた。

「まあ、さうでございますか。お可哀想に。お氣をつけていらつしやいませ。」と、顔立のはつきりしたお内儀がさう云つて送り出すと、

「どうもお世話さまでした。」と言つて、杖をつきながら、垢じみた頭巾と、袖口が

刀の柄のやうに切れたのを吹かせながら、よちよち歩いてゆくのであつた。

「宗匠、いい天氣ですな。」床屋の前を通ると、いつも聲をかけるのが、下剃りの喜三であつた。小學校をやめると床屋へ勤めてゐたが、俳句は蕉風も褒めてゐるほど上手であつた。

「いい天氣ぢや、相渝らず小鳥が好きと見えるの。」

と言つて、硝子戸に吊した小鳥の籠を、あご杖をしながら眺めこんだ。喜三はふしぎに小鳥が好きで、客のひまを偷んでは青味餌を磨つたり、水を浴びさせたりして、手数のかかる目白を飼つてゐたのである。目白は午前のうらかな日影をあびながらせまい籠のなかを彼處此處と翹つてゐた。その影は、うす濡りした秋らしい道路の上におちてゐた。

「やつと餌づいたばかりなんですよ。宗匠さんのお庭だとよく捕れるがなあ。」と、いつか罔籠を吊しながらゐると、たくさんの目白が群れてきたことを思ひ出した。

そのときもお半が八釜しく言つて、途中で止めたのであつた。あのお半さへ居なければ……。」と、つい口に出かかつたのを押しこらした。

「今にあれの留守のとき來なさるといい。居るとやかましくてな。」と氣の毒さうにいふ蕉風を、喜三は快よく眺めてゐるが、少年らしくツイ嬉しくなつて、

「宗匠、一つ剃つてあげませうか。だいぶ生えたやうだから手間は取りはしませんよ。」

と喜三は空いた椅子を指さした。「さあ。」と蕉風はもぢもぢしてゐるが、顎へ手をやつて見ると、

「いつの間にか伸びてしまつたものぢや。しかし毎度氣の毒ぢやな。」と、まだ遠慮深げに言つた。

「いま手が空いてゐるんだから關はないんです。」と、喜三は早や白布をばつとハタいて、椅子をすすめた。

「では剃つて貰ふかの。えらい氣の毒ぢやなあ。」

蕉風は、茶の包みと杖とを床几に乗せると、椅子に腰かけた。ごしごしと石鹼をつけると、りりんと美しい鳴りをもつてゐる西洋剃刀があてられた。

「歳をとると髭まで硬くなるものですな宗匠。」と喜三は、ざつくざつくと剃りながら言つた。

「ほんとにな。何十年剃ることぞい。剃つても剃つても生えくるさ。」と、蕉風は目を閉ちながら楽しげに言つた。たまにお半が剃つてくれても、寒い臺所で手箒を持されてきいきいした聲で煩ささうに怒鳴られるのと較べると、こゝは極樂のやうなものであつた。

でつぶりした親方がでてきて、ちよいと眺めると、

「宗匠さん今日は——。」と言つて「よく氣をついたな。よいことをした。」と喜三は言つて、さらさら新聞をひつくり返しながら讀んでゐた。宗匠は、それには答へな

いでるたが、いつの間にか眠つてしまつたのである。

「宗匠さんは眠てしまひましたよ。」と喜三は笑ひながらいふと、親方はやつぱり新聞をさらさら鳴らしながら読み読み、

「さうかい、年寄りだからな。」と言つたきりであつた。

ちえい、ちえいと目白が表で鳴いてゐた。

喜三は宗匠をゆり起すと、

「つい睡り込んでしまつたのぢやな。あ、いい氣持ちやつた。」

と顔を洗ひながら、はじめて親方を見ると、「喜三さんが一つ剃つてやると言はれたものぢやから。」と、氣まり悪さうに言つた。

「おやすい事です。お茶でも一つ。」と言つて「おい宗匠さんにお茶を……。」と、暖簾の奥へ聲をかけた。奥からなま若い聲で答へて、百姓の娘らしいがどこか温良しさうな親方のおかみが、お茶を侷めた。

しやどうも……。」と言つてひとくち喫むと、

「なかなか出のいいお茶ぢや。」と、奥へひきさがつたおかみを見ながら、

「いいおかみさんぢや。」とほめながら、「それでは大變おせわさまでした。」と喜三がそばから持たしてくれた杖と包みをもつて、そとへ出て行つた。

空はやはりカラリと晴れあがつて、蕉風の搦つたい剃り立ての顎を風がヒヤリと當つて過ぎた。宗匠は何度も顎に手をやつては、珍らしさうにつるつるしたところを撫でながら微笑んで歩いて行つた。

柴折戸を開けて這入ると、お半が裏庭から出てきたが、

「誰方が待つていらつしやいますよ。年寄りのくせに何處を歩き廻はつてゐるんです。」

と、ケンを含んだ聲で言つた。ほそ長い、目尻の釣り上つた蒼白い顔の三十女であつた。蕉風はすこし遠い耳をつき立てたが、やはり柔順に、

「喜三がの、髭を剃つてくれたので暇取つたのぢや。お客は誰方か。」と、言ひ譯らしくいふと、

「先月の句帳を見せて貰ひたいと言つて來られたんですが、何處を捜しても見えな  
いんですよ。」

お半はさういふと、竹箒で前庭をさらさら掃き出した。

「句帳かえ、あれは手文庫のなかにあつた筈ぢや。」

と家へはひると、女關に待つてゐた商家の小僧さんらしいのに向つて、

「今出してあげますぞ。たいそうお待ちしましてな。」と言つて、奥へ這入つたが又  
出て來て句帳を渡してやつた。小僧がかへると自分の室へかへつて坐つて、いま買  
つてきた茶袋をブリキの罐にさつとうつした。それから茶器を取り出すと、湯加減  
をちよいと指さきで鐵瓶にあたつて見て、考へるやうにして一人で茶をいれた。  
庭は柿の落葉で紅くそまつてゐた。からからに乾いて、風もないのに絶えず干か

らびた何かの響とも音ともつかないかさかさした音がしてゐた。

蕉風は幾杯も茶をついででは飲んで、「ああまい。」と繰り返しながらひとりごとを  
言つてゐた。

裏庭からその縁側へ出てきたお半が、疲れたらしく竹箒をがたと縁側へ投げ  
出したが、蕉風がお茶をのんでゐるのを見ると、けんどんに怒鳴つた。

「お茶がなくなると思つてゐたら、黙つてあなたが罐から掴み出したんでせう。い  
い加減になさいよ。」

さう蕉風の左の手の茶碗と顔とを憎らしさうに見つめながら言つたが、蕉風は、  
とぼけたやうな顔をして、

「たつた今町から買つてきたばかりぢや。黙つてお前のものを取りはせん。」

と言つて罐を振つて、なかみのあるのを知らせた。けれどもお半はそれだけのこ  
とではなかなか承知しなかつた。



「いつもさうなさるから言ふんですよ。いつもが、肝腎なんですよ。」と障子にひびくやうな聲で言つた。蕉風はすぐ黙つて眉を曇らしながら、吐息をついた。いまのいままで、濃い爽やかな緑の液体であたためられた胸もとが、ひいやりと物悲しくなつたのである。何を言つてもあの女には分るまい、と、いつもの通り黙つて句机をとり出した。「年寄りの強情なのは龜の子より強情なものですよ。」お半はかう譯のわからない怒りばい聲でいふと、蕉風はひくい聲で、「さうぢや、龜の子ぢや。」と呟いたがお半には聞えなかつた。

「こんな庭が落葉で一杯になつてゐるのに、すこしも掃いて呉れもしない——。」とお半はそこらを掃き出した。垣根のあたりには早や冬近いころを思はせるやうな水仙の芽立ちが、もう落葉と落葉との間から顔をさし出してゐた。

晴れつづくと、よく蕉風は草取りをさせられた。前庭の垣根にしやがんで、綿入でからだをふくらかしながら、年寄りらしく綺麗に草むしりをしてゐた。綺麗にす

ることに、自分でも楽しみを感じるやうでもあつた。さういふとき、喜三などがくると、すぐ手傳つてくれた。

「茶の花の白き夜明や渡り鳥。とはどうです。」と言つて、宗匠としやがみ合つて話すのであつた。「茶の花の白き夜明や渡り鳥か。なかなか上手い。では、茶の花の佗しきころの小袖かな。はどうぢや。」と蕉風がいふと、喜三は口眞似をして吟んで、

「やはり宗匠さんはうまいものですね。」などと言つてゐると、お半が、  
「早くして下さいよ。まあ、今朝からかかつてゐるぢやありませんか。」

勝手の小窓から怒鳴るのであつた。蕉風は黙つてゐた。喜三は、顔をしかめて、  
「がみがみ言ふ女ですね。宗匠さん、腹が立ちませんか。」といふと、

「いくら言つたつて黙目だからの。打ちちやつておくのぢや。」と、對手にもしないやうに言つた、草むしりがすむと、室へあがつてからお湯が冷えてゐても、お半の手をからずに蕉風は自身で水を汲んで、それをあらたに沸すのであつた。

火鉢の火が赤くなると、喜三はふところからよく菓子の包みを取り出して、そこにならべた。さういふことによく氣のつく喜三は、來るごとに柿や柘榴や、ときには蒸菓子などをもつてきた。

「毎度濟まんの。」と言つて、宗匠は瘦せ枯れた手つきで茶をいれるのである。喜三は火鉢に手をかざしながら、かういふ宗匠と自分だけが對ひ合つてゐる世界を愉しむやうに、寒さうな坊主頭をちぢめて、ときには黙つて蕉風の點取りをながめたりするのであつた。句机に向つて蕉風は、一つの俳句をみるのにも、いくたびとなく音讀をして、考へて、その上、れいの點を加へるのであつたが、喜三はそのゆつくりした時間が、此處にだけ別な風雅なおもむきで開かれるのを、世にまたないものやうな氣がするのである。柿の木はもう裸になつてゐた。「爐開」とか「冬構へ」とか「山茶花」などといふ季節が、ひとりでに胸にうかんでくるやうな懐かしい季節に近づいたことが考へられる……うす暗い肌寒い蕉風の室、その上、いつも聴く鐵瓶

の音、さういふものが身にしみて感じられた。

「宗匠さんは幾つのときから俳句を作りなすつたのです。」と喜三は、自分よりも五十年もさきに生れた此のふしぎな老人にたづねたのである。蕉風は「をかしなことを尋ねる。」といふやうな顔をしたが、すぐ微笑ひがほをして、「さうぢやな。やつぱりあんたのやうな年頃からぢや。その時分はいまからいふと、もつと盛んでお城下では一と町に一人づつ宗匠がゐるたくらるぢや。皆死んでしまつて一代きりぢやが。」と言つて、目をぱちぱちやつたが「ほんとは皆死んでしまつてな。まるで今あのころから生きとるものは、わし一人くらゐだ。」と言つて、はあと溜息のやうに長く引いた。

喜三は黙つて、蕉風のかほを眺めた。古皮のやうにかさかさ乾いた皮膚が弛んで何といふことなく、宗匠も永くあるまいといふやうな氣がした。

「そのころは毎月大きな運座があつての。加越能の俳人がみんなお城下へ集つたも

のだ。まるでお祭りのやうな騒ぎぢや。」と、そのころ句會のあつた寺町の法華寺の下足札をすつかり出し切つたことなどを話した。あの時分からみると、このごろではすつかり廢れてしまつたものだ。そのかはり新派がはやり出したが……蕉風は新派がもう電車が走り出したお城下町に勢力をもち初めたことも、自分が最後のひとりであることをも知つてゐたのである。

句帳をさらさらめくりながら「わしも弟子はなし、まあ一代ぎりぢや。」さうひとり言のやうに言つて點取りの印形をぼんぼん捺してゐた。やぶれた袖口が唐黍の穂のやうに見えた。喜三は、これだけにしてゐる自分をも、その弟子に加へてくれなにかと思ひながら、ぼんやり頼りなげに蕉風のかほをながめた。「わしも弟子はなし、まあ一代ぎりぢや。」と云つた言葉を胸にうかべながら――。

蠅

## 上

仕事をしてゐて草臥れると、机の上に止つてゐる蠅をながめた。

ふしぎに蠅といふものは何處からどう來るかわからないものだ。ふいにやつてきて、羽をやすめる。あのままの姿で、人間が椅子の坐りごちをためすやうに、くるりと姿整を變へるのだ。それから、れいの後足で、美しい透きとほつた竹紙のやうな羽根を砥ぐ。砥ぐのではなく、足を洗ふのかも知れない。しきりなしに摺りつけるのである。

病人のそばに蠅と梨とがあるやうに、私のそばにきつと一疋か二疋かの蠅がある。

あたまの上に舞つてゐるか、背中に喰付いてゐるか、かならず影のやうにつきまとうてゐるのだ。

仕事をしてゐる間は、家のものと餘り口をききたくないし、友だちと話をすることも草臥れる。さういふとき、うるさい蠅がいらしくやつてきて、紫檀の机にかけを落すのだ。追ふても追ふてもくるのだ。いきなり頬のところを汚い足で、むづむづと縋りつくやうに止まるかと思ふと、ふいに立つてしまふ。溝水のやうな冷たいうぢうぢしたものが、頬のあたりにべつとりと食つつく。苛苛しくなつて拭く……、と又やつてきて、机の上に立てかけた鏡に止まつたかと思ふと、するすると二三寸迂り落ちる。鏡のなかの影と抱き合つて氣味悪く、すり落ちる。長い百足のやうに……と又、ぶむ……とやつてくる。棕櫚の葉でつくられた蠅叩きが、しつかり汗と呼吸と一しよに握られる……ときには、生白い女の手がしなしなと棕櫚の柄に蛇のやうに巻きついて待ち構へる。夏になるとふしぎに生々しく白くなる女の指

が、とぐろを巻いてその柄を握るのだ。

「ぢつとしてゐて下さい。ぢつとして……。」

女がいふかと思ふと、蠅叩きがばつさりと音がした。みると、小さな煙草のヤニのやうなかけが、もんどり打つて、空をつかむやうに六本の足で身悶えしたが、もう、それきりで動かなくなつた。

「ばつさりと遣つたな……ばつさりと……。」

私はふりかへつていふと、女は小さい奴を見くだしながら微笑した。その微笑のなかには粗暴を覆うてゐる苦しげな表情が、ほんの瞬間にあらはれてゐた。

蠅はやつぱり動かなかつた。氣絶してゐるのか、それとも全く死んでしまつたのか、または死んだ真似をしてゐるのか、私はそれをしげしげと見つめた。

どす黒い茶萸のやうな大きな目に、うすい玻璃を張つたやうなやつが、すこし微動くと一しよに、ほそい足の尖端がほんの少しづつうごき出した。私は時計を手にもつて、それをながめた。一分近くなつたとき、足は廻轉しはじめる車のやうに、次第に烈しく動き出すかと思ふと、こんどは一さいに藻掻きはじめた。

「死にはしなかつたのだ。氣絶してゐたのだ。」

さう私が考へてゐるうち、くるりと、からだを疊の上でひと廻りさした。又廻つた。羽が鳴り出した。青い蜻蛉のやうなからだが見る見るうちに一種のつやを帯びはじめた。とうとう、ひつくり返つて起き直つた。うしろ足が羽の表と裏とをはけしくこすりはじめたのだ。非常な速力と、非常な熱情と……そのとき羽がひり／＼震へ、蜻蛉のやうにつつ立てた。

と、かれはいきなり立つた。羽の音がした。蠅といふものは非常に亂雑な縁状をゑがいて立つものだが、この弱つた小さな奴は、すう／＼と一直線に、からだをやつ

と浮かして空氣が重いやうな羽搔きで、遠い飛行器のやうに立つて行つた。——私はそれを趁つた。縁側は熱い日光が一杯であつた。ぎら／＼した上でかれは下りた。弱弱しく、いつものやうにコセつかないで、應庸に……かれの蜻蛉の蒼さはここでは虹のやうに輝いた。美しく限りなく美しくだ。羽がしきりなしに搔かれ磨かれた。ていねいな一人の職工が熱心に仕事をしつづけてゐるやうにである。

間もなく微かな風がおこると、それに乗りうつるやうに立つた。こんどは、さかんな日光のなかを矢よりも迅く、ぶむぶ……と飛んで行つた。

或る朝、私は一正の蠅をつかまへた。そして、その羽根にインキを沁まして、そのまま離してやつた。

午前ちう私は狭い庭と室室をしらべた。私の室にゐるのが勝手に見つかつた。女中がそれを報らせたが、午後はまるつきり見なかつた。晩、いちいち天井裏をしらべさせた。ふしぎに蠅といふものは、夜になると天井板にびつたりと黒い斑點にな

つて動かさないで休んでゐるものである。けれども最う姿を見ることができなかつた。れいの足で磨くにしてもなかなかでききれないほど、その胴にまで青いインキをなすつておいたのだ。が、その翌日も見なかつた。それから蠅と私との隔離について考へることに淋しい氣がした。

下

或る時、私ば町から離れた五六里もあるところに登山した。山のなかにも大きい蠅がゐる。すぐ私や友の匂ひをかぎあてて羽鳴りをさせながら集まつてゐた。それは人家などで見るより形も大きかつたが、そのかはり鈍かつた。静かな山の中の空氣が、こつこつ小さい昆虫の上にもあらはれてゐることを感じた。

私どもが其處から市街へかへるまで、絶え間もなく圓をゑがいたり、あるひは脊なかに止つたりして執拗く離れない幾疋かの蠅がゐた。わざとからだを振るやうに

して追つても、すぐ舞ひもどつて、いつの間にか背中にダニのやうに平つたく喰付いてゐた。三人の連れのひとりづつの背中に、一疋二疋かが止つてゐるのであつた。私どもが家へかへつて着換へをするときまで、この山のなかの蠅は離れなかつたのである。ふしぎにかねは他の方へ飛ばうとせず、汗くさい脱ぎすてた着物の匂ひを慕つて、疊んだ上にもやんといつまでも止つてゐた。

私は毎日蠅をみてゐるうち、ふしぎに蠅といふものの淋しい姿を見つめてゐたのである。あるときは女の長い間かかる化粧のひまを盗んで、生白い肌のところねばりついてゐる蠅を見たことがあつた。そのときは、實にふしぎな彫りものを見るやうな氣がした。透明なうすい光をもつ羽根や、黒い彫刻的で細微なからだなどが、妙に昆虫らしい落着きと微妙さとをもつて、深く木彫りのやうに止つてゐるのをみたとき、その生白い肌との釣合や、女といふ不思議な生きものの分けてもその肉體のいら立たしい感覺と結び合されて、美しいもの以上の美しさに見惚れたことがあ

つた。それはそのまま貴重品か何かのやうにをささり返つて、かつちりと白い肌  
に象嵌されてゐたからであつた。

尼寺を訪ふ



私の小説「古き毒草園」の金澤の市街には、去年の秋からかかった電車が、そのかみのお駕道ともいはれた大通りを美しい斑猫の這ふやうに、しかもゆつくりと全市街を通じて二十七臺ばかり走つてゐた。道路の下地がよいので、椅子に坐つたままそつと動かしてくれるやうで嬉しかった。

わけても目を惹いたのは、運轉臺のブレーキに、さまざまの色あひの毛糸で編んだ袋がつけてあつて、その迂りの鹽梅を調度してあつたのを見たとき、ひとりで微笑まれた。電車が停まるごとに、明るい大通りの屋根越しに初蟬の聲がしいしいいと起つてゐた。

犀川で降りると、すぐさま川上の鱒屋へ晩飯をたべに行つた。鱒屋の二階から菩

提樹の廣葉の水つぼい緑をながめながら、従弟の貞一と酒をのんだ。餅といふ大きい頭をもつた魚は、早い流れの美しい石のかけに潜んでゐて、淡いながらも嘯みしめると沁み出るやうな味ひをもつてゐて、午夢のすだれ切りの新しいのをあしらつてあるのも甘かつた。あなごの素焼と、お腹の紅い櫻うぐひのおつゆも軽く、おちついた味をもつてゐた。

ふたり來た藝者のひとりには、いはゆる「毒草園」のほそぼそしたかたちの女で、すこし額が青すぎてるたが、それは、ほそぼそしたままの姿で、鮎やうぐひや菩提樹の緑深い二階にふさはしく、よい調和をあたへた。も一人の方はどんより曇つたやうな色黒いからだをしてゐて、泥くさい田舎の匂ひがした。

水の匂ひの烈しい犀川べりを従弟とあるきながら、少年のころを此處をよくあるいたことを思ひ出した。

妻のさから、これも腹の紅い石斑魚いさなの尺たらずの大きなやつを五疋、水に泳が

したまま、私の氣の毒な母と私とにとどけてくれた。生かしたままの送りものも、故郷の習慣で實にひさしぶりのやうな氣がした、それほど犀川にはよい生き生きした川魚がとれるのだ。田端の家でかういふやつをお汁につくつたら甘からうと思はれた。

「お前におかねなぞ貰うてはえらい濟まんと思ふがの。」

母はさう言つて昨年あたりまで金をせびつた私をふしぎさうに眺めた。

「いや……何もその別にかねが取れるわけではないが……。」

私は暗い寺の廣い室をひとわり眺めて、ぞつと寒いやうな變な氣がした。かねのなかつたころの私の亡靈が、そこらにぐんにやりと唾つてゐるやうな氣がして仕方がなかつたのである。

朝になつて私は父の墓の臺石に「年號と自署」を石材にかいて、その足で母と二人で墓參にでかけた。

墓寺は寺町の奥で、俵から降りると、しんとした寺院の静氣がふうはりと私をつんでくれた。何んだか知らない寂しい鳥が、秋空のやうな響をもつた墓地に啼きしきつてゐた。

「お前がお墓参りなどをしてくれるとは思はなんだよ。ほんとに、ゆめにも思はなんだ。」

と母はしくしくと濕つたこゑをした。そつぽを向くと、藪地に煙のやうな筍がいちめんにごいごい伸びあがつてゐた。

私はなるべく母の感情的なるものに觸れないやうにして、

「出かけませう。俵が待つてゐるやうですから。」

と、母はしよぼしよぼした目をあかくして、

「もうすこし居てあげたらいいのに、かうして一人でおさびしからうに。」

振りかへりながら言つた。二人を乗せた俵が淋しく森として寺町通りを走つた。

「美しき水河」のなかのお吉やお鶴にも、こんどの旅行であふことができた。

姉の家へゆくと、私は藝者や半玉の化粧室をちよいと覗いてみたが、この前行つたときから五年も経つてゐるのでどれがお吉やお鶴やらさつぱり見當がつかなくなつた。午後五時ごろでそろそろ午睡から起きた女たちは、寢そべつたり鏡臺に向つてゐたり、またつつましく縫ひものをしたりしてゐるのも居た。

いつそ海べりでも歩かうとおもつて、廊下縁をつたひながら裏庭へ廻ると、そで垣をめぐらした井戸端で洗面をしてゐる女がゐて、すぐお鶴らしく思つたが、雫がぼとぼとと落ちる顔に今兩手をかけて、さつともう一度水をすくつて洗はうとしてゐるところだつたので、すぐ聲をかけることもできないので、しばらく見つめてゐると、足音を耳にいれたのか、すぐこちらを向いて、

「まあ、何時いらつしつたんです。わたしちつとも知らなかつた——。」

吃驚したやうな顔をしてさう言つたが、なめらかなあぶらをしいたやうな皮膚をすべる雫が、白く透いて、いくつも光つて、たらたらと流れた。

「もう少し前にきたんだ。すつかり大きくなつたね。」

瘡せたお鶴がこんなにまですつきりと脊丈から、肉附までまとまるものかと、あら水でこすられた根い皮膚をながめた。

「あたし、すぐ顔を洗つてしまひますから……。」

さう早口でいふと、泡だらけのしやぼんで顔ぢうを白くしたが、すぐそのあとへあたらしい水を二三度ばかり両手でながすと、皴の肌のやうな美しいつるつるした皮膚が、浸した毛桃のやうにあらはれてきた。それを手拭でふきながら、

「すつかりお見ちがひしましたわ。始めどなたかと思つたんですよ。どうも見たことのある方だとは思つてゐたんですけれど……。」

お鶴は微笑ひながら言つた。落ちついて見たところ藝者らしい遊い妙にもわか

りのよささうなところを感じさせた。

「お鶴さんにしても随分變つたな。第一ふとつたよ。」

さう言ふと、手をさすつて見て、

「あのころはまるでお箸みたいだつたわね。細くてね。」

お鶴は裏庭へ出ると、離れの六疊を指さしながら微笑つて、

「あそこにいらしつたんですね。覚えていらしつて——。」

「あ、覚えてゐる。一本になるのは厭だつて言つてゐたぢやないか。」

あのころのお鶴の陰氣な、子供らしくない目をふいとおもひ出した。それにくらべると、今のお鶴の目は濕ひと擦りと、そのうへ絶えず微笑つてゐるやうであつた。

「あたし藝者になるのは厭、半玉もいや、みんな厭。」と言つた病的に沈んだあのころのお鶴は、ひと晩ぢう茶の間にぼんやりと坐つてゐて、どこからお座敷がかからなかつた。

私はほそ面ながらに、たつぷりした頬の垂れをながめると、しぜんに、胸からおなかのあたりまで、はすかひに視線をはしらせた。

「どうしてじろじろ其塵にお見つめなさいますの。」

素早く私の視線が何をさぐつてゐるかを讀破した。何も彼も知つてゐる。と私は苦笑しながら、

「お吉はどうしたんだ。ちつとも見かけないやうだが……。」

私の言葉が終わらないうちに、

「とうとう言ひ出しなすつたわね。わたし先刻から必つとおたづねになるとさう思つてゐたんですよ。」

「いや、ちよつと尋ねたばかりなんだ。變つたらうな。」

お鶴は靜かに微笑つたが、すこし冷たさうな言葉で言つた。

「店の間にいらしたやうですよ。いまに顔を洗ひにくるわ。そしたらゆつくり話

しなさいな。」

變にひつかかつたやうに言つた。そして又すぐに、

「おなじみなんだから……。」

さう言つて急に日脚をみると、海の方が夕明りして、土蔵が暑さうに眩しく光つてみえた。

「わたしまだお掃除をしないのよ。いそがしいの。」

さう言ふかと思ふと、もぢもぢと二三歩うしろへ歩き出すと、縁へあがつて母屋へ行つてしまつた。

「すぐああいふ風になつてしまふのだ。すこしでも負けたくないのだ。」私はさう思ひながら、裏戸からすぐ海岸へ出ようとすると、縁廊下にはたばた音がした。

「やあ、お吉か。」

と振願へると、顔をあかめて、

「おひさしうごちいます…。」

非常におちついて言った。踏みつぶした大福餅のやうにふくれあがつて、多すぎる髪をぐるぐると蛇のやうに巻いたやつを、ばつさりと額から頬へかけて右の方へへし潰してゐた。

「相渝らずだな。」と言つて、ふいと見ると、その表情の落着いてゐるのにちよいと驚いた。氣取つてゐるなと思つて、よく見ると、柔しさうに澄んだ目が、やはり苦勞したものにありがちな、動かないでただ靜かに微笑つてゐるのであつた。「ふむ。かはつたぞ。實によく變化つたものだ」と、つんと私は私のふやけた心をつきもどされたやうな氣がしたのである。

「さつきから店にゐたのかね。ちよいと覗いて見たが分らなかつた——。」

「わたしちゃんと知つてゐましたの。いまお鶴さんにひやかされたから、飛んできてしまつたんです。」

お吉は呼吸ぎれのするほど昂奮して言つたが、私はその表情が非常に永く藏つておいた果實のやうに、だんだん日が経つにしたがつて柔くなるのを見た。

「お鶴さんは半玉の時分とはすつかり人が變つたやうだね。なんだかツンとしてゐるやうだ。」

お吉はちよつと無意味に微笑んだが、すぐ眉をすこし擡めた。

「働きすぎるのよ。それに彼の時分とはすつかり異つた女になつてしまひましたの。」

「どういふ風にだいい。」と言ふと、

「いまあなたが仰有つたやうに澄したり、妙に邪推深くなつたやうなの。」

「そんなところもあるな。」

私は殆ど以前にくらべて、二人とも反對の性格を寫し合つたのを感じた。陰氣でじめじめしたお鶴がさかんに容あつかひが上手になつたことも、當然なことに思へたが、このお吉がこんなに落着いた女にならうとは思はなかつた。

晩食のとき、お吉は膳をはこんできた。にこにこ微笑ながら長い縁側をべたべたと重い踵の音をたてて来た。

「もうご飯かい。」

「ええ。」

「お前が来てゐてもいいのかね。」

「いいのよ。お鶴さんにいらつしやいと言つたら、厭なこつたと言つたきり、ぶいと二階へあがつてしまつたんですの。ほんとに變よ、あの女は。」

お吉のかういふ言葉のうらに、私は妙にお鶴のズネたやうな顔がさし覗いてゐるやうで不愉快であつた。

膳の上に姉が言ひ付けたりしいお酒がつけられてあつて、お吉は、  
「お酌。」

と言つて九谷の徳利を手にとつた。手首が弓なりにくりくりな圓をゑがいた。

「なかなか上手だな。」

さう言ふと何がをかしかつたのか、または私の眞面目さをくさしたつもりか、ほとんど突然に、

「ふふふ……。」

と含みこゑで、こころもち身體をくねらして笑つた。やつぱり子供の時分のやうな笑ひ聲だつたので、私はひさしぶりな氣がした。

晩、お鶴が私のゐる離れのそばへきたので、お吉のことを問ふと、

「きらひなお客なぞがゐるて煩さいと、すぐお座敷から歸つてしまふの。あれで非常な手嫌らひをするのよ。でもあなたのところだと女中に持たさないでお膳などを持つてゆくわ。」

お鶴はかう言つて、どこか、かさかさした氣持ちでゐるので、私は親しめないやうな氣がした。それにお吉のことなら他人にたいしても毛嫌らひすることが當り前

な気がした。

「今でもお吉さんの方が、あたしより好きでせう。」

突然、お鶴が言つて妙にからだを振ちらせるやうにした。

「どうだか、しかしお前はむかしの陰氣なときの方がいいね。すつかり擦れてしまつた今よりかね。」

からだが良いても、何んだか出ながれの茶のやうな味氣ないお鶴になつてゐるこ  
とがかんじた。赤ン坊が甜めまはしたお玩弄品のやうに、だんだん剥けてゆく危な  
さをその毛桃のやうな顔から感じた。

「あたしそんなに擦れてゐるかしら、みんなさう言ふんですけど。」

變な物にはぎれたやうな寂しい白い表情をした。「お前はどこかツンとしたところ  
がある。」と言はうとして、私はきふに黙つてしまつた。

そこへお吉がくると、そつと縁側へ腰をかけながら、ぼんやり暗い星ぞらを眺め

てゐるが、すぐお鶴は、

「あたしが居ちやいけないでせう。ね。さうでせう。」

と言ふかと思ふと「鐘が鳴りますな空に」と大きな聲で唄ひながら行つた。そ  
れが洒々してゐて憎らしい氣がした。あんなに温良しかつた子があんなに變るもの  
かと思つた。

「お吉。」

といふと、暗がりです。「ええ。」と答へた。

「お鶴はどうしてあんなつけつけした子になつたのだい。」

さう言ふと「どうしてですか、流行るからですわ。」

さびしさうに答へた。かたよよい伸び脊丈をもつたお鶴にくらべて、お吉はごつ  
ごつしてゐた。氣をつけてみるとお吉はむかしとは反對にひとりで帳場によく寂し  
さうに坐つてゐた。



久しぶりで尼寺をたづねた。海岸の町から離れた一軒家で、前には砂丘と松林がつづいて居り、うしろは北加賀の野を一面に負つた寂しい尼寺である。その二階に二十歳のころ居たことがあつたので、歸國するたびに決つて一度は訪ねて行つた。庵主は五十に手がとどいてゐるが禁慾者にありがちな、どこかまださつぱりしたところがあつた。

「よく入らして下さいました。昨年は奥さまがおいで下さつて、そのせつも色々ありがたうございました。」

庵主はさう言つて、縁側へ座布團をとり出した。去年、家のものが歸國したとき、その尼寺をたづねさせ、若い時分に世話になつた禮をのべさせたのであつた。家ものが歸京して「あんな寂しいところによく暮せるものですね。まるで一軒家なんですね。」と言つたから「あそこで一生野菜をたべて生きてゐるんだ。」私はさう言

ひながら、セチ辛いこの世の隅に、ああいふ慎しやかな生活もあるのだと、快よい夢のやうなこの尼寺のことを考へたものであつた。

「順道は此洲から不良うございましてね。奥の間に臥てゐますよ。」

「どんな病氣です。」

もう順道が二十三になつてゐることを思ひ出した。私のゐたころはやつと十三ぐらゐで、まるくと肥つた血色のよい、尼さんには惜しいほど美しい子であつた。庵主とふたりで奥の間へゆくと、閉ぢこんだ襖をあけたときから熱くさい匂ひと藥の鋭い匂ひのほかに、蒸せたやうな異性のためだから發した温氣が、室一杯にみなぎつてゐた。うす暗かつたがすぐ順道の蒼白い顔とまるくと刺られたあたまが目にはいつた。

「室生さんがいらしたんですよ。」庵主が枕もとでいふと、順道は目をあけて、ちからの脱けた視線をそつと私のかほにそそいで、

「まあ、おひさしうございます——。」

順道は起き上らうとしたが、私は手で、

「そのままにしてゐたつて話ができますから、ちつとしていらつしやい。」

と言ふと、「ごめんなさいまし。」擡げた頭をまた枕の上においた。夜のやうな暗みある閉めこんだ空気が、順道のすこしばかり落ちこんだ頬にたまつてゐるが、それが却つて肉ぶとりした頬やあごの圓みを美しくまとめて見せた。

「ほんとに早いものでございますね。あなたがお二階にいらしつてから十年にもなりますからね。」

「早いものですな。順道さんが十三位だつたからな。」

私がかういふと、病んだ尼はうつすりと濕つたやうに微笑した。そして、

「折角いらしつて下すつたのに、あたし病氣してゐたりしてすみません。」

順道はいかにも病人らしい弱い聲でかう言つたとき、私はある靜かな感動がゆる

く氣もちの上に流れたことを感じた。あたまを圓めてゐても女は女だ。こんなに優しい言葉をいふ。……そのとき、ばかりと音がした。順道が夜具から手を出して夏蜜柑を取らうとしたのだ。その肥つた腕はぐんなりと鮮かに白くそして重い音をたてたのであつた。

「お前がほしいのかい。」庵主は母親のやうな優しさでいふと、

「いいえ、お客さまに……。」

「いや僕ならいいんです。」私がかう言ふと、

「せつかく彼の子がいふんですから。」庵主は厚い夏蜜柑をざつくりと皮を剥いだ。烈しい酸性の香気がきりきりとあたりの弱りきつた空気をひりつかせた。私はすぐ口もとがすつばくなつた。順道とすつばさうに臉をほそめながら庵主の手つきをみてゐるが、たまりかねて、

「あ、酸ばい……。」

さう言つて白みがかつて微笑をした。誘はれたやうに私もほほゑんだ。  
「お、酸ばい……。」

庵主まで目を蜻蛉のやうにすすしく震はせた。だんだんうす暗い室になれると、順道がなまなましい太い腕をむき出しにして、横になりながら夏蜜柑の袋を剥いてゐる手つきばかりが目にはいつてきて仕方がなかつた。ときどき、自分で自分の手の重みをささへるちからが弱りきつて、れいのばたりといふ重い音をたてた。  
「ゆつくり遊んでいらしつてくださいますな。い、んでせう。」

順道が言つたから私は今夜泊ると明日はかへらなければならぬと言つて、

「まだ行くところもあるんだし、それに仕事もあるから……。」私はさう言つて順道をちらとみると、

「明日はもうおかへりになるんですか。」と淋しさうに寝がへりをした。  
私だちはこの室を出ると、縁側へ出た。隠居さんが出てきて、

「よくこそ入らしつた。大きくおんなすつた——。」

さう言ふ隠居さんは十年前の顔と同じであつた。齒がぼろぼろに脱け落ちたので、ぐんにやりと脛が尖がつてゐた。

「十年前も今もすこしも貌が變つてゐない。人間も老齡になると變らないものらしい。」さう思ひながら、

「隠居さんはおいくつになつたんです。ほんとに達者ですな。」と言ふと、

「もう九十一になりました。」

「九十一。」私は呟いてみて、非常に變な氣になつた。それは非常に古い陶器などと同じい年代のやうな氣がして、むかしは濃かかつたらしい頬のどがつた皮膚が、茶褐色に肉つきとは別々に剥けかゝつて、ひらく／＼した落葉のやうにみえた。

「お迎へがあるかと、今日も明日も待つてゐますぢやが、なかなか業があげませんぢや。」

隠居はかう言つてお茶をついだが、思ひ出したやうに、

「東京に百五歳のお年寄りが居られるさうやが、あなたはごぞんじないかの。まだしやんしやんしていらつしやるさうやが……。」

私はどうして隠居がこんな田舎の一軒家にゐる東京のことを知つてゐるかが不思議だつたので問うた。

「誰かに聞いたんですか。」と言ふと、庵主が話を引きとつて、

「去年役場から調べにいらつたとき、百五歳の方がいらつしやるつて――。」

「さうですか。東京は廣くて僕は知りませんが、隠居さんはそんな人のことをきくとどんな氣持になるんです。」

私はこのふしぎな高齢者をみながら言つた。

「會うてみたいと思ひましてな。わしより一と昔もちがひますので、いろいろ話がきけると思ひますから。」

隠居がしよんぼりした目でかう言ふと、庵主は快活にわらつて、

「いつでも隠居さんはあんなことを言つて戀しがつてゐるんですよ。やつぱり年寄りには年寄り同士がいいんでせうね。」

庵主が言つて微笑つた。隠居はなほ眞摯なかほをして、

「どんな顔をしてゐるなさが見たいのです。やつぱりわしのやうに老けてぢやるか。」

みんなはまた微笑ひ出した。私はなんだか老人と老人との間に何か別なものが働きかけてゐるやうな氣がした。百五歳まで生きながらへた人の顔を見たいといふ隠居も、私からみれば不思議な年代と、人間の永い生涯とを經てきた人だ。その龜の子のやうに黒ずんだ曲つた腰つきで、子供らしい齒拔聲でものをいふ隠居をみてるると、人間も實に永く生きられるものであること、弱さうで堅まりきつた高齢者の肉體が、生きものよりも何處か古い骨董のやうに感じられることなど、しづかに私

のあたみに考へられた。

縁側から裏の畑がみえ、桑のわか葉が一面にそよいでゐた。そのとき襖があいて、順道が寝巻姿でそうつと歩いてでてきた。庵主がおどろいて、

「風邪をひきかへすといけないから、寝てゐたらどう。」

座布團をあたへながらいふと、弱いこゑで順道は、

「わたしも話したくなりましたの。ねてばかりゐるときびしいんですもの。」

病人らしく口のねばつたのを氣にしながら言つて、靜かに坐つた。桑畑のみどりを含んだ海からする夕明りが、順道の病氣してもどれだけでも衰へてゐない頬をそめた。膝の上においた手も白かつた。

「いつごろ東京におかへりなさいますの。」「だるい聲で言つた。」

「二三日中にはかへるんです。早く病氣をなほすやうになさい。それにだいぶ寒い

やうだが……。」

海からの風が桑畑で冷されて、すこしぞくぞくしてきたので、私は順道にさう言つて寝るやうにすすめた。

庵主もすこしづつ迫る寒さを襟もとにかんじたらしく、

「行つて寝なさい。こんなにさむくなつたから。」と順道を急きたてた。

「ええ。」と言つて順道は立ちあがると「ぢや、すこしやすみますから御免なさいまし。」と、ふらふらと壁にそひながら二た足ばかりあるくと、白い壁地に滲んだやうな黒い寝まき姿と、まるい頭と、あざやかな素足、それから妙に釣られるやうな弱々した腰つきで、大の字に手をひろげて危なさうに歩いてゆく恰好が、あまりに彫り過ぎたもののやうに寂しく目にうつつた。そして襖のそばへゆくと、するつとそのかけに隠れ、襖の閉められてゆく次第に狭くなる隙間から、白い寢床がぼんやり浮いてみえた。みんなは黙つてそれを見送つた。

晩の鐘を庵主が搗きにでたとき、私もふらりと寺の前へでた。そこもいちめんの桑畑が松林までつづいて居り、松林からすぐ砂丘になつてこのごろできた無線電信局の帆柱のやうな電柱が幾本も立つてゐるのがみえた。海岸の長い日ぐれはなかなか暗くならなかつた。

このときのつそりと寺の前へきた異様な女がゐた。こはさうな髪が、唐黍のやうにむしやむしやになつて、帯も著物も破れて帆のやうになつて、太い足が棒のやうに下がつてゐた。日に焼けた顔は紅らんで、たつぷりした兩頬の肉があごのところ溜つて、波のやうな皺をつくつてゐた。女は庵主のそばへゆくとすぐに、

「ご飯をおくれ。」と言つたときり堂の壇のところに坐りこんだ。

「お前また来たのかい。あけますとも。」さう言つて勝手から井に入れた白いものと、きいろい澤庵とをやると、彼女はうれしさうに膝の上に井を置いて、手づかみで食べはじめた。うつむきになつてゐるので、くしやくしやな根い髪が炎のやうに額に

ぶらさがつて、殆ど顔をかくしてしまつてゐた。たゞ蒼白い井と、皮を剥いだ蝦のやうに緒い手が、しきりに口もとへ向つて急がしく働いてゐるのである。私は檻のなかの獅子をおもひ出した。はだけた胸のところはさすがに女らしく白い優しい肉の地をみせてゐたが、膝から足首までが一本の線になつてゐて、厚い圓い指は泥にまみれてゐた。

「どうしたんです、彼の女は——。」私はたづねると、

「乞食なんですがね。すこし足りなくて松林に臥たりしてゐるんです。可哀想ですが仕方がありません。」

庵主はかう言ひすてて鐘を搗きはじめた。桑畑の蒼茫として波打つ上をつたつて、砂丘からこだまをかへしてきた。私はそれをききながら、さきの女を見つめてゐた。女はみな食べをへると、井を堂の扉のうちに置いて、

「ごうも御馳走さま庵主さん。」と言つて唇甜めずりをした。厚い肉がきふに充され

た食欲のために、さきよりもつと熱さうにみえた。足も手も急にさきよりも精分がつたつたのか、健康さうな脂肪のひかりを漂はした。それらは總て動物的で壓迫的な、はげしい肉體の重みに悩んでゐるもののやうにみえた。

「今夜寝るところがあるのかね。日がくれるからね。間もなく。」

庵主が近よつて言つたとき、私もちかづいてみた。同時にはげしい異性の熱れきつた匂ひが重々しく頭にからみついた。ちかづいてみるとふしぎに美しい澄んだおどおどと正直さうな眼と、口<sup>くち</sup>に焼けてゐるがぴんと張つゝゐる皮膚はこまかいなめし皮のやうな、一種の野蠻なま、で可なり氣もちのいい光澤をもつてゐることに氣がついた。喉もとから胸もとへかけての生白い豚の肉のやうなふくらみは、手や足にくらべて柔らかさうに美味さうな食欲的の肉感をちよつとの間私にかんじしめた。

そしてからだに痒い蟲でもゐるのか、絶間なく脊なかをゆすつたり、腰のあたりを搔いたりして落ちつかなかつた。——私はそつと手をみた。里芋の根のやうな頑固

と不自然さをもつて肥え込んでゐるが、妙に處女らしい新しさをかんじさせた。水仕事や化粧品に荒されない新らしさで、泥と垢とにまみれてゐるが磨いたらきれいになるだらうといふ考へを起させたほどであつた。

かれはのつそりと起きあがると、ちよつと微笑つてみせて、のろい足どりで歩き出した。からだにつけた破れた旗のやうな著物が、私には深い毛皮のやうにみえた。

「何處のものかわからないんですか。」と言ふと、

「え。二三年さきからああやつて近村を廻つてゐるんですが、さつぱりわかりませんの。」

庵主はかう言つて寺のなかへはひつて行つた。私はそこらにある樹や草や土橋や砂丘をなつかしけにながめた。十年とはすこしも變つてゐない。

女はとみるとやはりとぼとぼと歩いて行つたが、高い叢のところのゆくと、いきなり著物を脱いではたいた。れいの痒い蟲でもはらつてゐるのか、黒い著物が海苔

のやうにはたはた音をたてた。かれの素な肉體はがつしりとしかも白く夕明りのなかにふくれあがつて、その一つ一つの隆起されたかたまりが、みな烈しい呼吸をしながら躍つてゐるやうにみえた。しかも砂丘の灰だみた背景を負ふ彼女のこりこりなむくれ上つたからだは、また私に逞しい獅子をおもひ起させた。一つとして休息してゐない局部のちからある踊りやうは、そのみだれた髪のを巻きあがつてゐる姿とともに、廣茫とした空と砂丘との間に轟立してゐたからであつた。

そのうち女は始どなすりつけるやうにして、そのボロをからだに著けると、松林の方へむいて異様に黒ずんだ姿を消した。私はそのあとまでぼんやり見送つてゐた。あまりに珍らしいものを思ひがけなく見たので――。

晩はすさまじい蛙聲がこの尼寺をとりかこんで起つた。雨戸を一枚あけると、どつとなだれ打つてきこえたが、それを閉めると雨のやうに遠くになつて行つた。

「殆ど十年ぶりでのこの蛙のこゑきくのだ。蛙のこゑといふものは何といふ氣もち

のよいものだ。」

私はさう思ひながら、間もなく提灯を借りて尼さんの著るマントを著て、星あかりの砂丘から濱へでてみた。誰一人通らない砂丘の砂地に自分の足音ばかりさくさくとひびいて、誰かが妙にあとからついてくるやうな氣がしてならなかつた。それに提灯といふものは目を掠めて遠目をきかなくするからでもあるのだ。私は提灯をマントのなかへ入れてしつとり濡れた濱へおりた。

ぼんやりと靄でしめつた海はまだ變な鉛いろの星あかりをうつしてゐて、沖がみえなかつた。ど、ど、ど、ん、ん、ん、といふ響はそこら一面に燃えるやうに起つてゐたのである。何が燃えたり煮えたりするといふことはない。たゞ一切がそこで湧いたり噴いたり燃えたりするやうな、はけいしづきと靄と、うすいひかりとを漂はしてゐた。私はいろいろなことを考へた。十年前の私といふ私と……私は濱から漁村へのぼつて、町へでた。そこには十二三軒の遊廓があつて、ざれ三味がし



づかな漁村のそこらに起つてゐた。

そこへはひると、頭ばかり大きい女郎衆がばらばらにある軒下に立つてゐて、ぐんにやりと微笑つて、

「おはひりなさいましな。」とマントの袖をひいた。ひよいを顔を見た。おしろいが鞍のやうに筋太く割れてゐるのが目にはひつた。「顔がきれいになれば……すつかりおれを誘惑さへしてくれば……」私はさう考へてゐた矢さきだつたので、マントを逆にひいた。女ははじかれたやうに私のかほをきびしく見かへしてマントを掴んだ手をはづした。そのとき、ひよつこり提灯が、かほを出した。墨でくろく寺の紋である卍の字があらはれたので、

「この人は坊さんよ。」

冷たい唇のさきで横にゐる瘡せた女にさ、やいた。

「いやな坊さん。縁起でもない——。」

その女もかう言ひ棄てて、そつぽを向いた。私はまたとぼとぼと歩き出した。「うむ。坊主とはよく言つたものだ。」と私は桑畑の中道を桑の葉にふれながらざさはさせてゐた。二町ほど離れたところに尼寺の灯がぼんやりと一つだけ眺められた。ふりかへると遊廓の灯と三味とが、海鳴りのあひまにさびれてきこえた。

朝、みんなで茶の間にあつまつて、ひさしぶりで春ぎくのおつゆや、青いおひたしなどで朝めしをたべた。二三本の櫻の若葉したかけに地蔭の傘がいちめんになえ敷いた庭をへだてて、土橋やけんけ田や榛の芽立ちしたのをながめてゐると、實にひさしぶりな氣がした。土橋の上を毎朝通つていつた村の女教員の派手な姿、それを見てゐてはよく尼さんに笑はれたものである。やつと詩をかきかけたところで、はじめ北原君から「屋上庭園」を送つてもらつたのもこの尼寺であつた。あのころはいつも東京へ出たいのと、東京の雑誌に詩がのつたらどんなに嬉しいだらうとい

ふ日夜の烈しい空想に驅られてゐるころであつた。

蘆の鳴るかぜたまは

哀しきことをおもはする

ふと口にのぼつたこの一章さへいまは忘れることができない。あれから十年経つたのだ。

「あなたはもう東京の人になるんでせう。お子さんでもできるとね。」  
庵主が言つた。

「やつぱりさうなるでせうね。地方では食へないから。」

さう私はこたへると隠居が、

「人の一念はつよいもんどちや。あんたのいらしつたころは、毎日書いてばかりぢやつた。ほんとに一念といふものはな。」

突然さう言つて感心したやうな顔をした。庵主が、

「ほんとにね。しつかりおやんなさいまし。」

私どもは食事をすましたころ、順道がまた昨夜のやうに釣られたやうになつて、ふらふらと蒼白い顔を茶の間に出してきた。弱いこはれやすいものをみるやうに、私は彼女をながめた。そして、

「今朝はどんな氣もちかね。いい方ですか。」

順道は病人らしく、だんだん縮むやうにして坐ると、

「ええ。歩くとふらふらして眩まひがしますけれど、氣もちはたいへんいい方なんですの。」

手を膝のうへに重ねて、だるいやうな呼吸をした。きらびやかな朝の光を櫻のわか葉のあひだにちらちらと眺めて、

「もうこんなに青くなつたのですね。」移り變りのはけしい季節をしみじみ眺めて言つた。順道の顔は睡てばかりゐるものの常として、やや腫れぼつた蒼白さはあつた。

が、それが妙に冷たさうに澄んで、澄んでゐるためにつや消しのやうなじ、みな光を  
つつんでゐるやうであつた。

そこへ又昨日の異様な女が庫裏へ廻つて這入つてきた。そして、

「庵主さん。何かお呉んなさい。おらお腹が減つて動くことができないけに。」

大きな聲で言つて、土間にあつた白の横に坐り込んだ。庵主は立つて井にごはん  
を入れながら、

「昨夜は何處で寝たのかね。堂の裏へでも来ればいいのに。」

女はやはり先刻と同じい大ききの聲で、

「砂山で寝ました。こちら様へ来ようと思つたけれど氣の毒でな。」と言つて、庵主  
から受取つた井のなかから、手掴みで白い飯をたべはじめた。その指さきは垢と泥  
とにまみれてゐるが、少しも氣にかけないらしくあつた。

それを眺めてゐた順道が、ちよつと眉をしかめながら、

「手を洗つてたべさせればいいのに……。」低い弱い獨り言のやうに言つた。庵主は  
又小さい聲で殆ど囁くやうに、

「よく言ふんだけど、すぐ忘れて了つて駄目なんですよ。」と言つた。

隠居は横合から女をまじまじ眺めてゐるが、

「可哀想にああして寝るところもないのですぢや。」

さう言つて自分で立つて臺所から澤庵をざくざく切つて持つてきて、女の井のな  
かへ入れた。女は犬のやうに飯つぶだらけの口をもがもがさせて、隠居を見ると嬉  
しさうな間抜けた人の善い微笑ひ顔をして「勿體ない、勿體ない。」と繰り返して。  
「御隠居様のお手づから頂くのはなほ勿體ない——。」女は又さう言つて、がりがり  
と白い歯で澤庵を噛む健康さうな音を立てた。

「人間は持つ持たれつですよ、あたしどもが町へ托鉢に行つて貰ふのも、あの娘が  
ああして毎日来るのも、みんな因縁なんですわね。」

庵主は庫裏をふりかへりながら言つた。隠居も順道もひとしく深切な柔しい顔いろになつて、犬に近いこの哀れな娘をながめてゐた。私はこの人達の陰ばかりな生活のなかにも、たえず美しい應報苦界のあること、隣近所もない一軒家が決して寂しくない賑やかな人間の心で組み立てられることを、愉しく潔よく感じた。女は食べてしまふと、けふはどうしたのか土橋のところの清水の湧いてゐるところで、きれいに井を洗つて持つてきて、

「御馳走さまでした。えらい旨しいことぢやつた。」

碌に廻らない口つきで言つて、又、のつそりと庫裏を出て行つた。寺の前の徑から、まつすぐに松林と砂丘の間道へ出られることになつてゐて、其處へ女は異様なボロで包まれた姿をはこんで行つた。砂丘は朝日にまぶしいくらゐに輝いて、徑も白くつづいてゐた。かれはそこをゆつくりした足どりで、王者のやうな寛さであるいて行つた。ときどき立ち停つてあちこちを眺め、妙に空の方へ氣を取られるやうに

仰ぐやうにしたり、さうするかとおもふと、やや永く地面を見詰めたり、また海鳴りのする方へ目をはしらせたりしてゐた。その黒ずんだ姿や、ちぎれた袖から長い肥つた腕が白く出てゐるのや、素足で膝から下が露き出しにされてゐるなどが、明るい路にくつきりと浮んでゐた。砂丘のゆるい頂とすれすれになつた青い空、その空にあるちぎれた白い雲、たえず走つてゐる烈しい海鳴り、さういふものがこの異様な娘をとめまいて寂しく私らの目の前にあつた。

「何處へゆくんでせう。海の方なぞ行つてどうするんでせう。」

私がかれが人家と反対の方へ行つたことを變におもつていふと、庵主が、

「濱へ行つてお魚でも貰つてたべるのでせう。何時でも生のままでお魚をかじつてゐるんですよ。」

眉をしかめていふと、順道も生ぐさい匂ひでも躰いだやうに眉をしかめた。

「よくからだに悪くないものですね。」私は船底が何かに腰かけて、なまのまゝの魚

をがりがりと頭から食べてゐる姿をおもひ出した。荒い蒼い海や漁師の入りみだれたなかで、悠然と坐りこんでゐる女を考へてみた。

「からだがるで鐵みたいになつてゐるんですからね。何をしたつて悪くなることがないんでせう。」

庵主が答へて、また女をみた。女はそのときは最う松林のなかを通りぬけて、砂丘のゆるい斜面のところどころ濱草で青く染められた上を登つて行つた。空の白い雲がすぐ女のあたまの上にあるやうな気がした。それほど女の黒ずんだ姿が明らかにな、あかるく夥しい朝の光のなかを押し分けるやうに、しつかりと重々しく歩いてゆくのであつた。

そのとき砂丘の絶頂にちやうど風貝鴉のやうに立ち上つた女が、まぶしけな手で眼を覆つて、ゆつくりと海洋の上をながめてゐるのを見た。——濱市のはうからは絶えず貝法螺の吹かれる音いろが、風の都合でやや遠く隔つたり近くなつたりして、

この尼寺の縁側にゐる私たちに聴えた。それらの一切は逞しい初夏のあふれるやうな明るい光の間に、一つ一つはつきりと視覚のうちにかんじられた。

「どうも濱へゆくらしいのね。」順道が私のはうを向きながら、疲れたやうなこゑで言つた。

「さうだね。あ、だんだん下りてゆくやうだ。」

女は海の方に向つた斜面を次第に降りてゆくので、その姿がしだいに隠れて行つた。すつかり見えなくなると、ただ、白く輝いてゐる砂丘の峯だけが、そらの雲をひつかけて寂しく震へるやうに見えた。

海岸から歸へると、私の寺に出入してゐた老人がその婆さんと一しよにやつて来て、私に會ひたがつてゐた。

寺男の老人は目が見えなくなつて、ことしで十七年になつてゐたが、夏は屋根葺

きもやるし、草鞋もつくつてゐた。そして私のために自然芋を掘ってきて呉れた。「自分で掘つたのかね。眼が不自由なのによく掘れたね。」

私が言つて古い自然芋の株を手にとつた。重い果實のやうな気がした。寺男の爺やは頭が非常に大きかつた。それを振りながら、見えない目をばちばちやつて、

「四五年前に植ゑて置いたんぢやが、あんたが歸つたと聞いたので掘つてみたが、なかなか良く太つてゐました——掘ることなぞ何んでもないのです。」

老人はさう言つて庭にある古い百合の株根や、霧島つつぢなど、もし要るやうだつたら東京へ持つてかへつて呉れと言つた。

「わしがお寺にゐた時分、あんたはまるで片手の掌に乗るほど小さい坊ちやんでした。早や大きくなつてな。」

爺やは大きな手を出して、いまにも私とその手の上に乗るもののやうに指をひろげて見せた。そんな小さい時分もあつたであらうが、しかし何故かこの爺やが嘘でも

吐いてゐるほど、私は私の小さい時分を忘れてゐた。その上、爺やは、

「爺、のお願ひはな。すこしからたに觸らして欲しいことぢや、目が見えんと、かう手で觸れるのが楽しみぢやでの。」

と爺はその鯨のやうな大きい頭と膝とを、ざらざら音させて疊の上に乗れ出した。ふしぎに胴がそのまま、からだは變なくの字なりに曲つた。「まさか身體をなでられる氣にもならない。それに變な氣がする。」と思ひながら、

「話してゐたら、たいがい判りさうなものぢやないかね。」

私はさう言つて、なるべく身體にふれられる機會を外さうとしたが、爺やはなかなか聞かなかつた。

「ちよつとでいいからの。老いさき短かいものぢやから。」

さう言へば云ふほど、爺やの不自然に大きい頭と、盲目者にありがちな、どんより曇つたやうな皮膚の色の不良いところや、へんに白眼がちなのが、貝の蓋を引べ

がしたやうに、ばちばちするのが氣持わるく思はれて仕方がなかつた。

横から母が微笑つて、

「觸れさしてあけてもいいではないかの、ほんの鳥渡の間我慢したらいいのだから、さうしてお上げ。」

と言つてくすくす笑つた。私は可笑しいのと、それとは反對にからだの縮むやうな慥つたい氣にさへなつた。が、しかたがなくなつて、

「爺や、こちらへお出。」

と言つて、私は肩さきを伸べた。と、龜のやうな手がざらざらした砂や泥をふくんで、そつと今にも肩さきへ下ろされるやうな慥つたい氣がした。と同時に、私はそのとき實に微妙な娘のやうな羞恥と顔の赧らむやうな氣とを、ぼつと心から色に出したほどであつた。私にもかういふ優柔な氣持ちが潜んでゐることを珍らしくさへかんじた。

「人間といふものは不思議なもんだ。かうして昔手のひらに乗つた人がこんなに大きくなるのですからな。」

爺はさう言つて、しぜんと癖のやうになつてゐる手つきで、肩さきを揉みはじめた。そして、

「少し揉んであげませう。」

と、ごりごりと肩さきの凝りをほぐしてくれた。嚴丈な手さきのちからが節々した肩のこりこりしたところを捏ねるやうに、だんだん軽く明るくした。煙のやうな煤ばんだ蜘蛛みたいなものが、そこから一杯に這ひ出してくるやうな氣がした。

そのときから不思議な娘らしい始の恥かしさが、いつの間にか失せてしまつて、とり返しのつかない氣もちがした。それと同時にさつき私が言つた「爺や、こちらへお出。」と言つたことが、私でない別な優しい人間が言つたやうな氣がしてしかたがなかつた。

「人間には實にふしぎな感覚があるものだ。へいぜい考へあてることのできない微妙なものが、ときどき不意に顔を出してくるものだ。」

私はさう考へながら、庭の敷石をかこんで青く蒸した苔をながめ、そこにある廣い山齒朶の影が映つてゐるのをながめて、故郷にゐることをしみじみ感じた。

愈々東京へ歸へる前の晩、もと居て賣つた家へ行つて見ようと思つて、その前へゆくと、廣い家だけにすつかりしも、た屋を拓いて小料理屋になつてゐた。

私はうすぐらく蝙蝠が何かのやうに這入ると、すぐに二階へあがつた。しよつ中行きつけてゐる客のやうである。

私は廣い八疊に通された。

「お誂ひは……。」

と言つたから簡単に「酒をもつてきて貰はう。」と、そこに坐りこんだ。よその座

敷には客がなくて静かであつた。

障子をあげると、うしろの岸川の水の音が、こんもりした隣の寺の庭木をくぐつて、湧くやうに起つた。森とした空に星があつた。

それから私の勉強室になつてゐた三角の室へ行つて見た。壁、窓、柱、闕、天井、さういふところをいちいち調べるやうに眺めてあるいた。壁にはピンの跡があつた。ひまな時ぼんやりと往來から坂を登つてゆく女や、夜番の巡查を何氣なく眺めてゐたことをも思ひ出した。

そこは廓の入口になつてゐて、そのころよく遊んでゐたので、市街の料理屋へ口のかかつた藝者や半玉が、白いぬき襟姿で通行人に知れないやうに、車の上から目で挨拶して行つたことも思ひ出した。

私は桂をつるつる撫でて見たりした。

女が酌をしてくれた。「おれがかう言ふ風に坐つてこの座敷で酒を飲むこともふし



きな気がする。」と思つた。

「裏の梯子段を毀してしまつたのかい。たしかにこの座敷についてゐるのだが……」  
と言ふと、氣のきかないおどおどした女はふしぎさうに私の顔をまじまじ眺めて  
るたが、やつと「え、さやうで……。」と答へた。

「それから物置きはどうしたのかね。このつぎの座敷の裏の……。」

女はなほ變な顔をして見つめて、何か言はうとしながら、間拔けた顔をしてゐた。

「暗い窓が一つきりしか開いてない物置きなんだが……。」

私が疊みこんでかう言つたとき、やつと女は、

「あの物置きはすつかり毀して、六疊の座敷の裏にしてしまつたんですの。」

さう言つたから「ちよつと其室を見せて呉れないか。」といふと、女は益々不思議  
な表情をして、

「どうぞ、ごらん下さいまし。」と言つた。

そこへ行つて見ると、すつと以前、私は母や姉にかくれて買つた扇やゴム珠や、  
さういふ物をいちいちこの物置の長持のかけや、壁ぎはの暗いところに匿してお  
いたものであつた。それゆゑ、私はこの小さい暗い窓のある物置が幼少のときから、  
よく隠れて這入つたので忘れられなかつた。それに私の家には古い三冊からなる異  
常な「春畫」が古い長持にかくされてあつたので、こつそりとこの物置にはいつて  
は、うすくらがりのなかでへんに埃ばんだ藍いろの空気を吸つては、喘ぐやうな劇  
しい色彩と、頭のなかを棒か何かで掻き廻されるやうな混亂とを感じながら見詰め  
たものであつた。

その上、母や姉に見つけられはしないかといふ懸念に、おどおどと自分で自分が  
がちがち震へるのを感じながら、そのあやしい畫を一心に眺め入るのであつた。そ  
こでは床板がめしめし軌るので、その齒がゆい音まで今の私に考へ出された。「あの  
ころのおどおどした氣持は何といふあやしい變なものであつたらう。しかもその小

さい窓明りがどんなに私の目をちかちかさせたであらう。「私はあるときなど、そこに敷いてあつた蓆のやうなものならざらしたのを、殆ど無意識で苛苛しく掻き毟つたことさへあつたのだ。」私のあやしい情慾が殆どあのときからすつかり形と色とによつて幻影をつくるまでにさせてゐたのだ。」と、私は思はずにつこりとした。と女は氣でもふれてゐる人を見るやうにうしろ退さりした。

もとの室にかへると、

「庭に牡丹の大株があつた筈だつたが……四五十輪も咲くやつが……。」と言ふと、女は「それはもうございません。」と言つた。

「では支那柿といふ小豆柿の木があるかね。杏、梅、それから三ツ葉……。」

さう言ひ出すと、女はしまひには、急に氣味悪く立ちあがつて、

「わたし、ちよいと階下に用事がございますので、ごゆつくりなすつて下さいまし。」

と言つて降りて行つた。きつと氣味わるく思つたにちがひないのだ。

私はひとり窓から永い間きかなかつた水の響をききながら盃をなめてゐた。

そこへ女が急に走つてあがつてきて、呼吸をきらしながら、

「あの失禮ですけれど、以前にいらした方ではございませんか。家の模様をござんじですし、階下にもそのやうに申して居りますので……。」と言つた。

私は微笑んで、もと此家にゐたものでまゝことを言つて、非常にすまないが庭を一度見せてくれるやうに頼んだ。それに明日は發たなければならぬのであるからと——女はすぐに階下へ行つたが、

「ではどうぞご覧くださいませ。」と言つて提灯に火をつけて、庭へ出た。

庭へ出ると水の響がいちどきに、杏や梅や柿の若葉を透して起つた。空はくらかつた。私のあたに残つてゐるぐみの木や小梅や木珊瑚なぞか、みな以前のやうにすこし露ばんで美しい緑をつけてゐた。春になるとほかほかと温かさうに芽ぐんだ

土を眺めて此處にながく住んでゐて、いつもこれらの土や木にしたしんだことを思ひ出した。

「牡丹がない……たしかに此處にあつた筈だが……。」

私は獨言ひとりごとの様に言つて、小さな花壇になつてゐる様なむくれ上つた土を見つめたが、芽らしいものすらなかつた。

「こちらへ參つたときからございませんでした。此處だけが空いてゐたんですの。」  
さうすると、彼の牡丹はどうなつたのであらう。いざござに紛れて植木屋にでも抜かれてしまつたのであらうかと惜しい氣がした。夏のはじめになると、いつも眞紅な大輪を四五輪も咲いたのだ。

石垣のところ、犀川の水をしばらく眺めてゐたが、女はぼんやり提灯をもつてゐるのが氣になつて、引き返した。

「この三ツ葉はたべられるんだ。春のうちに摘んでね。」

さう言つて女の持つてゐる提灯をぐつと引きよせて、私はかなり伸びた柔らかい縁を手につれて見た。そのさはりは私の心にまだ青々しい新鮮さで残つてゐた。

「へえ。さやうで……。」

女はぐどんさうに言つてちよいと眺めた。そして機械的に私のしたとほりに觸つてみたのである。

「それから彼處にある寒竹は、ときどき風を透すために刈り込むのだ。」

私は言はなくともいいことまで言つて、そしてこの小料理を出た。「こちらへ入らつしやいましたら、またおいで下さいまし。」と其處に坐つてゐたおかみが手をついて言つた。おかみのそばに十六七ぐらゐる若い娘が、私の方を向いて坐つてゐた。

「どうもお邪魔しました。」さう言つて、私は天井裏をひよいと見ると、そこに貼られた古い悪魔除の札が、私どものゐたころのまま煤まみれになつて残つてゐた。「あれはおれの子供のときから張られてあつたのだ。おれはあれを毎日見ない日がなか

つたのだ。と私はその拙い木版の般若面をながめると、ひとりでに微笑まれた。——  
そとへ出るともう一度私のた二階をふりかへつて眺めた。

春と地中に住む者

(地中に住む者の一) みんな眠つてゐるのかい。

(その二) うん。みんな眠つてゐる。

(その一) 起てるのはお前とおれだけだね。

(その二) そんなものだね。眼はあけてゐるが眠つてゐるやうだ。

(その一) 地面の上からガリガリと音がしてくるのは、もう氷つたのだらうか。

(その二) 凍えてゐるんだらう。

(その一) 匿れそこなつた奴が居るだらうな。

(その二) 毎年のことだから、凍みついた奴も居るだらうよ。

(その一) 可哀想だが仕方がないね。

(その二) 可哀相だが仕方がない。

(地中に住む者の一) 毎日毎日暗いことだ。何か食ひたくないかい。

(その二) 何もほしくない。動くのも面倒だ。じつとして居るといい心持だ。

(その一) 穴はもう寒がつたかね。

(その二) だいぶさきから明りがささなくなつたから、多分閉ぢられたのだらう。あれを開けるのは楽しみだ。

(その一) それも遠い話さ。やつと手足がしびれ出したばかりだから、これがお前だんだん暖かくなつてひとりで動くまでは大變だ。永いことだよ。

(その二) ほんとにな。あの音は何んだらう。しきりなしに續いてゐるのは……。

(その一) 吹雪だらう。

(その二) 吹雪をみたことがあるかい。

(その一) いちどもない。寒くてそとへ一步も出られないから見たこともなからうぢやないか。

(その二) いちど見たいものだ。いやな音だ。

(その一) からだにひびくね。

(その二) うん。すこし痛んでくる。

(その一) もつと此方へ寄れよ。

(その二) これでいいか。

(その一) それでいい。

\* \*

(地中に住む者の三) おれのそばに誰かゐるのか。

(その四) ああるよ。

(その三) おれはお前が見えない。

(その四) おれも見えない。だがお前の匂ひがする。

(その三) おれもお前の匂ひがする。お前とおれとはあまり遠くないやうだね。

(その四) 聲のあんばいでは大へん近いやうだ。おれが誰だか判るかい。

(その三) ちやんと知つてゐる。

(その四) さうか。知つてゐるかい。おれもお前を知つてゐる。お前は圓くなつてゐるな。

(その三) うん。圓くなつてゐる。この方がらくなんだ。

(その四) お前はおれとはさきにこの穴へはひつてゐたやうだね。

(その三) さきだよ。おれは目がきかなくなる前にいつも穴にはひるのだ。

(その四) お前とはさきに這入つてゐた奴がゐるかね。

(その三) 随分たくさん居たよ。穴の入口は一杯だつた程だ。それも皆がそれぞれ

何處へか匿れてしまつたやうだね。みんなちやんと自分だけの穴掘りをして籠つてゐるから不思議だね。

(その四) ほんのからだだけ這入れればいいんだからな。

(その三) この穴はかなり深いやうだね。何處までつづいてゐるか分らないな。

(その四) 毎年穴のなかを今年こそ調べようと思ひながら、ついからだが利かなくなるので、それきりになるんだよ。

(その三) たくさん居るだらうな。

(その四) これが地面の上なら大へんだらう。ことにお前などはするぶん狡い奴のうちだからな。

(その三) 皮肉るね。おれも穴にある間は優しいものさ。第一、腹がへらないから殺生をしなくともいいのさ。おれも本統はいつも穴にゐるときのやうな、ゆつくりした氣でゐたいのだよ。別に殺生もしなくていいし憎まれもしないしさ。

(その四) 本當だ。お前がこんな温和しくしてゐることは蟻だつて知るまい。此處ではお前も佛だよ。

(その三) 地面の上へ出ると、ふしぎに元氣になつて氣が荒くなるんだよ。穴のなかにゐて一冬ぢゆう、來年こそ温和しくならうと考へてゐても、すぐもう殺氣だつてしまふんだよ。

(その四) あそこはぐづぐづしてゐると此方が遣られるところだからな。無理もないよ。しかし地面の上はいいな。

(その三) からだが伸び伸びするよ。地面の上を考へるとね。

(その四) 出たくないか。

(その三) 出たいな。

(地中に住む者の一) 誰かが話してゐるやうだね。

(その二) さつきからするんだよ。あの聲はききおぼえがある。お前はどうか。

(その一) おれもさつきから知つてゐるんだよ。

(その二) たしか厭な奴だね。

(その一) いやな奴だよ。

(その二) しかしいつも穴の中にある間はやはりからだか利かないんだらう。

(その一) さうとも。おれだちと同じいやうに痺れてゐるんだ。

(その二) ちよいと可哀想だね。

(その一) 此處は全く樂なものさ。みんなが同じい程度で不具なんだから。

(その二) どうも近くにゐるらしいな。

(その一) 聲の調子ではね。

(その二) やつぱり近づかない方がいいんだよ。



(その一) さうとも。危ない奴はどこに置いても危ないからね。

\* \*

(地中に住む者の五) だいぶ穴のなかが騒がしくなつたやうだね。

(その六) この二三日急にわいわい聲がしてくるやうだ。

(その五) まだ春ではあるまい。

(その六) まだだとも、さう早く春になるものか。

(その五) しかし毎年待ちくたびれたころに温かくなるやうだぜ。まだまだと思つてゐると突然温かくなるんだからね。

(その六) それもさうだ。からだか動くかい。

(その五) すこし動くやうな氣がする。氣のせいかな。

(その六) おれも動く。

(その五) 土に觸れてみる。土がぼろぼろしてゐたら大丈夫だ。

(その六) 土かい。ほらこんなにぼかぼかしてゐる。

(その五) しめたぞ。

(その六) 出ようか。

(その五) みんなの動くのを待つてからにしよう。ひよんなことをすると寒い目にあふぜ。

(その六) ぢや落着いてるよ。

(地中に住む者の三) おい。

(その四) うん。

(その三) 急に静かになつたぜ。穴のなかが、何だか動き出したやうだ。

(その四) 妙に重苦しいほど静かだ。お前の目が光り出してきたぜ。いやな目つき

だね。

(その三) おれの目が光り出した……うん、なんだか見え出したやうだよ。暗いには暗いが……。

(その四) あ、あれは何んだ。

(その三) 蟲だ。

(その四) そろそろ操り出してゆくのだな。勢ぞろひしてゐるやがる。

(その三) 小さい奴だが嬉しきうにしてゐる。元氣になつてゐる。

(その四) お前うごいて見ろ。

(その三) そら、動くだらう。

(その四) すぐ出かけるか。

(その三) いやまだ四五日はかうして不動として居る。みんなが出たあとで出かせよう。

(その四) おれは胸がむかむかする。

(その三) まだ子供だな。

(その四) 子供でもいい、胸がわくわくする。

(地中に住む者の七) 誰かが穴を開けはじめたやうだぜ。

(その八) 何時聴いてもいい音だね。あの音がするとひとりでに身體がうごくから妙だ。

(その七) だいぶ明りが射すやうになつた。あ、みんな這ひ出したぜ。

(その八) 目に見えない奴まで歩いてゆくから可笑しい。

(その七) だつて彼奴らも永い間穴ごもりをしてたんだもの。おれたちと同じい氣持で嬉しいんだらう。

(その八) それもさうだね。あ、いい風がはひつてくる。芳ばしい匂ひをもつてゐる風だ。出かけよう。

(その七) うん。出かけよう。

(地上に出たる者の一) まだ寒いな。

(その二) だいぶ寒い。

(その一) すぐ疲れるね。永く眠つてゐたから。

(その二) どうも呼吸ぎれがしていけない。氷の破れる音がする。あちこちから、きこえるかい。

(その一) 先刻からじつと聞いてゐるんだが、あの音はいい氣持だ。

(その二) もう穴にゐる奴は居ないだらうな。

(その一) 一疋だつて居ないだらう。聞いてみる、みんなが這つてゐるのが聞えるぢやあないか。地べたに耳をあててみる。ほら、遠いところからして来るだらう。

(その二) うん。きこえる。

(その一) さあ、そこで君とも別れなければならぬ。

(その二) さうだな、いつまでも一緒に歩いてゐるわけにゆかないね。それでは君は行くか。

(その一) また冬になつたら會はう。さよなら。

(その二) さよなら。

草  
枯  
れ

毎朝、温かい床からぬけて出ると、屋根の上や樹にはおもさうな尺餘の雪がつもつてゐて、こんな澤山の雪が一夜ぢうによく降つたものだ、長い町つづきが一面に深い雪道になつてゐるのを、ぼんやり懐手をしながら白い呼吸をはきながら見守つてゐた。あちこちの家家の私と同じやうな子供らも、みんな未だ夢のあとを趁つてゐるやうな、うつとりした眼つきで、まづ門のところに行つてゐる私を見つけると、へいぜいの親しさを、大人らにはわからない微笑をとり交すことによつて、あさの挨拶がはりににつこりとやつて、さうしてまた、まぶしいほど明るい何處かちかちか光る星屑のやうな雪の反射されあうた屋根、電線、やや遠い橋、白い道路などを殆んど毎朝のやうに眺めるのであるが、また毎朝のやうに新しい幼ない

感激に嘔かされるのであつた。

それらの降りぬいたやうな雪の朝ぞらには、さすがに空の白くぼやけた灰だみた肌いろが、妙に一種のつかれたやうな、ふくれたお腹のたるんだやうなところがあつて、それらが低くだらりと郊外のはうにむかつて、遠く吊り手の切れた天幕のやうに落ちこんでゐた。私だちは僅かに三十分ばかりもさういふぼんやりした町や人家をながめてゐると、いままでの寢床のぬくとまりが惜し氣もなく外の荒いとけとけした寒さに揉み消されてゐて、きふにさむさに氣づくところどは家にはひつて、朝の食事をすまして登校の道をゆくのであつた。

まるでそれは毎朝のやうに、野町といふ古着屋の軒をならべた通りで、多いときは三頭ほど、すくないときは二頭の牛が郊外へ牽かれてゆくのに會つた。みな、いちやうに肥えた温かさうなまるまるした大きな生きもので、のろのろと麻繩を鼻のあなに搏りつけたのをぐいぐいと手強く引きながら、小者はたえ間なく吐つたり、

ひつばいたりしながら、その坂をのぼつてゆくのであつた。その時分は私どもの登校ざかりなので、みんなはわいわい言ひながら牛のまはりをとりかこむやうにして、牛とつれ立つて行くのであつた。しかし女の子供らは恐がつて、みな軒下にかけこむと紅い毛絲の手袋をはめてゐても凍りつくやうに冷たくなるのを、口のところに持つて行つて白い息をかけながら温めるやうにしてちつと見つめてゐたりした。

まい朝のやうにみた牛のどのかほも、みな悲しげな飴いろの眼がうたがひ深さうに、右つ側に立つてゐて眺めてゐても、また左つ側から見つめてゐても絶えず向ふでも注意してゐるやうだつた。ときどき、私はわざと両手をぱつとひろげて注視をひいても、またたき一つしないで、落ちついて横目でじろりと眺めるだけだつた。その鼻の穴には金具のくわんが通され、それには太い麻繩が結びつけられて馬子のやうな身窄らしい男がひいてゐた。あの牛は逃げようとしたつて自分の鼻がとれた

あとでなければ逃げられないだらう。そんな痛い目にあふことは自分でもいやであらう、それにしてもあの鼻のあなに誰があんな鐵のくわんを巧みにはめこんだのであらう、などと私は考へながらみんなと連れ立って、ちやうど牛のゆくのが學校近くだったので、ぞろぞろと繩のやうにそのあとにつづいて行つた。

ところがその町から郊外の田圃道へ出てゆく、榛が二三本寂しげに立つてゐる橋のそばへ來ると、どういふものか何時も牛はびつたりと足を停めて動かうともしなかつた。そこから廣廣した田圃がつづき、はしばみの枯れた畝がつづき、煉瓦の高い牛舎がひと棟だけ、その野に沈んだ赭い色を浮き出しているのが、そこから眞すぐに見えるのだ。

小者が牛をびしびし打いたが、牛はそのたびごとにこりこりのろくろにかけて削つたやうな角のさきをひりひりと震はせては空の方へすこしづつ拘つてゐた。けれども、からだは地べたに生えたやうに動かうとしなかつた。小者は苛立つてちから

のあるかぎり、お尻のところをびしやりと遣つつけ、またあるかぎりの汚ない乗言葉で、牛の魂を脅かしてつけてゐたが、その鈍なひづめがざくざく雪の凍れた地面にくひ込むだけで、ただでは動きさうに思はれなかつた。けれども長い尾がそのたびごとにくるくると苦しげに巻きあげられたり、だらりと絶望的に打ち垂けられたり、またきふにあらゆる身悶えをふくんだやうに空のはうに向つて、再びするすると烈しく怒れるもののやうに巻き上げられたりした。

私だち子供らはまい朝のやうであるが、牛がその町と郊外の岐れ目にくると動かうとしないわけを知つてゐた。わいわい言つてさはいでゐた連中も、そこではみんな言ひ合したやうに牛があばれ出してくれればいい。さうして憎らしい小者をあの角にひつかけて地べたに叩きのめしてやればいいといふやうに、一心になつて牛のかほを眺め入るのだ、しかしそのかほは亂れてゐない。ゆがんでもゐない。ただ、がつしりと釘づけにされて空氣のなかに置かれたもののやうに、鬱鬱とした何だか

煙のやうなものに、不思議にとりまかれてゐるのだ。

「あの牛はみんな知つてゐるんだね。あの道をつつと行くだらう。さうして自分がどうなるつてことを知つてゐるんだ。」

と私はそばにゐる友だちにささやいた。その子供はいつも級にゐると「ぐづのろ」と呼ばれてゐるほどのろのろした友だちだつたが、

「だつて牛が知つてゐることはないよ。なんだかあの鼻を妙につき出すやうにするぢやないか。」

と言つたので私はそれに目をとめると、ふしぎなことには、牛はその濡れた鼻の先きを衝き出すやうにして野のはうにむかつて、そこから吹きさらしてくる風のかなから、ゆつくりと懐かしげに何かを軋ぎさぐるやうな氣はひを見せてゐた。

私はハツとした。いやないやな匂ひがしてくるのだ。その匂ひのなかにいろいろな人間のうち、とくに憎らしい仕事がまざつてゐることをかんだ。

「お前達ははやく學校へゆかないと遅れてしまふ」はやく行くといひ」

さつきから牛のお尻をびしびしと撲りつけてゐた小者が、白い齒をあらはしながら何處か優しげにかう私だちに言ひながら、またびしびしと鞭をあてた。

私だちは、いぢやうに、理由のない怖氣をかんじながら、小者がかう言ひ放つと一しよにぞろぞろと輪をみだして、みな、もときた道へ出て行つた。みんなが町角をまがらうとして振り返つて見ると、牛はまだ動かうとしないで、長い雪道に黒く憂鬱にいつまでもそれが一とかたまりになつて、ぢつと凝り固まつてゐるやうに見えた。

しかもそれからの毎朝の牛は毎日のやうに私だちとかほを合せたあめいろのやつや、黒と白のゆきどけ道のやうなブチのやつや、そのほか、ちひさいやさしい目とちよこちよこ走る仔牛や……それらは毎日そこへ行くばかりだ。まい朝いく正かづつ冬ぢう。……



行

燈

これは田端の話である。

田端の町つづきが道觀山を境目として岐れると。もう日暮里になつてゐる。その岐れ目は崖みたいな丘地が多く、住みよい家がならんでゐる。日本料理で通のゆくと、ころらしい自笑軒の料理場と向ひあつて、一軒のしるこ屋があつてちよいとした庭をあしらつた薄暗い座敷が一つあるきりで客のない時は一週間もなささうである。その室は八疊で、萩や南天、水引草が紅い。苔も生えてゐる。晩方など、そこで番茶でも飲んでゐると、自笑軒の料理場で、ばつさりと鯉か何かを料る水気ぐんだ庖刀の音がするかとおもふと、尾や鰭をハネるらしい庖刀研えのしたカンといふ音がする。ざつくりと骨を刻み込んだらしい調子もきこえる。

となりの室からピンポンをして遊んでゐる此のしるこ屋のむすめの、ほほほといふ微笑が甲斐絹のやうな操つたい音を立てる。となりの間は客がはひれないので、襖が閉められてゐて、椽には古簾が二枚、埃ばんで、それゆゑなほ古雅な重さでだらりとかけられてゐる。そこには菊がすこし作つてある。鶏頭も火を點けてゐる。靜かなピンポンが臺の上で卵のからを投げ合ふやうな音を立てる。

「ほほほ……。」と滴るるばかりである。廁の窓さきは篠竹の暗すんだ茂りて埋まつて、行燈が一つきり生白く、ぼんやりと戸の前に置かれてあつた。おかみさんといふのは老婦ではあるが、流行おくれの蝙蝠傘をかかへてよくそとから歸つてくるのを見た。何もお世辭のない女である。何をしてゐるものか分らない。も一つは、れいの古簾が座敷の方にもかけられることで手編にでもしたらしい隙間だらけのやつである。やつぱり二枚きりだらりと掛けられるのである。

「鹽あんの田舎を一つ……。」といふと、

「へえ。」と女中が、すつと消える。色の白いむつちりと肥えた子である。

その寂やかな座敷に坐つてゐると、ふしぎに機を織る音が、どこからかしてくるやうな氣がする。秋もおそいこのごろになると、妙にわたしはそこで小耳をかたむけることがあつた。土のせい草木のせい、田端に多い、するる……と啼くむしが、この南天のしけみにまで啼きしづんでゐて、あぐらを掻いて、汁粉の箸をもつ手が、自分でもおかしいほどの靜かさである。てん、てん、ばたん……と機の音がする。

「四十二錢で八錢のおつりを……。」と女中が銅貨をざらざら疊の上にならべた。「どこな機でも織つてゐるのかね。あの音は。」

と尋ねると、いろ白な女中が、わたしと同じいやうに小首を傾けて、

「いえ。べつに機を織る家なんてございませぬが……。」

と、さう言ひながら頭をそつと浮かすやうにした。

「さうかね。しかしあの音はへんだね。」といふと、女中は考へるやうにしてゐるが

「自笑軒で何かお料理をしてゐるんぢやございませんでせうか。」とも言つた。けれども、やはり静かなあたりにやや遠いところから、てんてんばたん……と機音がしてきた。

「どうもするやうだ。よほど遠いところかららしい。」

と、私は下駄をひっかけながら漏れた灯かけに少しづつ紅みを點じた長い水引草をながめた。それにみな影があつた。

「ほんとにするやうでございますね。あたくし今やつとわかつたんでございますが。」さう女中は言つて踵を立てて、ぞろりと膝から上をそろばんのやうにつつ立てながら、考へ考へ聞耳を立てて言つた。

「こんどはだいぶ近くなつたやうだ。」私もかういふて立ちあがると、鳴子板のついた門を出た。さつと白い風がためく頬にふれて過ぎた。

てんてんばたん……てんてんばたん、星ぞらからも落ちてきた……。

### カツレツと令嬢

ふしぎにカツフエなどに勤める女は、みな赤子のやうに柔らかく肥つて、まるっこい手首をしてゐるものである。ひとつは、あぶら濃いカツレッツとか、ピフテキとかを食べるせいもあるが、また他の條件としては妙齡な生若い女に限られてゐるからもある。

かれらは鳶職とか、下駄屋とか、屑屋、古着屋、髪結、学校の小使などの娘が多い。たまには後家のひとり娘もあるし、洗濯屋の婆さんの家からも出てくる。美しい階段から舞うて下りる蝶のやうな給仕女、卓テイルから卓テイルの間をほつそりと泳ぐ彼女は、たいがい濕つた裏町の、最つと濕つた長屋の隅や、乾いて附木のやうにがさがさしてゐる半窓のある二階にござろして居なければ、理髪店とお湯屋にはさまれ

た裏路から、ひよこりと朝髪のぬき襟姿で、澄しきつて、つんとして出てくるものである。帯は半帯で、指輪は必らず朱い珠のある五六圓のやつでなければ、かまぼこの形のほそい奴である。そして妙に鴉のやうにびよこびよこ歩く癖を持つてゐるのが通例である。

朝の十時ごろの上野廣小路や、銀座の十字街などに、まだ錢湯の匂ひのする顔と襟とをつん伸し、金鶴香水で臭くなつた紙のやうに白いえり首の女が、こんもりと半帯をかついで、あちこちを眺めながら、さて電車に乗るのを人々は見るであらう。娘かと思れば、それにしては餘りにけばけばしいし、女中かとおもへばすこし贅澤すぎ、さうかと言つて大家の小間使でもなければ女學生とは無論ちがふところの、ふらふらした一種異様な、隙間だらけな、飼猫が町へでも飛び出したやうに白つぱくふらふらしてゐる格好の女を、その午前十時ごろの電車のなかでつくづく何者だといふふう<sup>に</sup>に考へるだらう。さういふ女がどの電車にも一人づつ乗り合してゐるか

ら妙である。小石川の春日町が不良少年の張り場であるやうに、晩になると銀座の交叉店や上野廣小路の瓦斯燈のいろも青みがかると、何を待つといふことなく、たえず一定の道路をあち行きこち往きしてゐる服をきたのや、和服なのや、黒の帽子や茶色ののを冠つたあやしい人物を見出すであらう。かれらはその一時間近くも歩いてゐるうち、ふしぎに一人つづの女と一しよに闇に消えて行つてしまふのであつた。たえ間ない電車から吐き出される女のうちから、ふいと乗り換へを外してしまふやうな女は、ひるまの、一種異様な金鶴香水と紅茶とカッレットとの臭氣の泌み込んだ女であるのである。

ふしぎにカッフエの給仕女といふものは、その指輪や帯や半襟止や紅い蝙蝠や緑色のオペラバックに至るまで、ことごとく、卓<sup>ツル</sup>の上にお客が最後に投げ出された櫻色をした五十錢紙幣をはじめとして、ボロ切れのやうな二十錢札や蜜柑の皮のやうな十錢札、一錢二錢の古い銅貨などを集めて、それらのものを購ふのである。それゆ

る、カッフェの近くの小間物店や大福餅屋などは、いつも彼女らに兩換をしてコマカイ金にして貰ふのが常であつた。だから彼らのなかに十圓紙幣はおろか五圓紙幣をも美事に使ふことがないのである。そのためか、十圓紙幣を一度手にいれると減多にそれを使ふことがなかつた。それ以上にこまかい金をつかつて、その紙幣はなかなか離さないであつた。

十年も以前に淺草のバーにゐた女が、そのころ流行かけた金の腕輪をはめてゐたが、去年の夏に雨にあつて茅場町の角のビヤホールに飛び込むと、偶然そこに相滲らず給仕女になつて、頬も抉り出てゐたし、鼻の穴などは汽罐車よりも黒かつた。「あのころは妾も若かつたんですのに、もうおばあさんになりましたよ。」と、むかしと少しも滲らないがらがら聲で笑ふのであつた。

「腕輪はどうしたんだ。金の。」といふと「腕輪ですか。」と言つて、

「あ、あの腕輪ですか。もう、とうくに無くなつてしまひましたよ。ほんとにこち

らは能く覚えてゐらつしやいますのね。」向ふでは疾くに忘れて了つて、そんなものを箆めてゐたかといふやうな顔をしてゐた。それきりその女に會はずじまひであつたが、ことしの春、淺草の小さいよたよたバーにゐた女が、ふしぎにライオンに出てゐた。その女のいふことには「あたしが淺草にゐたなんて言はないで下さいな。」と人目を忍ぶやうに擦れちがひに囁いたことがあつた。

「言ひはしないよ。妙なことを氣にするもんだな。」といふと、

「こちらはやかましいんですから。」と、十四五から出た女で、小川町のカッフェにもゐたり、深川のへんな洋食屋にもゐたりしたこともあつたが、そのつぎの月になると既うライオンにはゐなかつた。

淺草のよか樓におなつといふ給仕女のゐたことを知つてゐる人があるだらう。白い前垂をさせないのは彼處のきまりで、女らはいまにも良家の小間使のうちから、または下町の商家あたりの娘が抜け出てきたやうに、冬はストーヴを取り巻いて

喋つてゐた。そのうちのおなつは一番古く、だいいち、目つきが何時も情熱的になちがち震えてゐるやうなところがあつた。落ちついて、しんなりと挨拶をする女であつた。それが突然姿を消してしまつた三年目にこの物語を書く主人公に上野の廣小路に會つたときに、おなつは、けつそりと痩せおとろへて、へらへらな浴衣をかからだに巻きつけて、かれを見ると、れいの通りの落ちついてしんなりと挨拶をして、さて、

「おひさしうございますこと。」と言つて、もぢもぢと後退さりをするやうにしてゐた。

「たうとう一緒になりましたか。たいへん痩せたやうだね。」といふと、

「え。もう世帯持ちになつたものでございますから。」と、流行らなくなつた活動寫眞の女優のやうに、れいの大きな目を悲しさうにかれの目の前に据ゑた。いつか、かれが雨に降りこめられて、おなつから黒塗りの蛇の目傘を借りたことがあつた。

下町づくりの立派なつるりと光つた金口のやうに細い傘であつた。

「やはり彫刻師ですか。いつか話にきいたそのひとですか。」といふと、おなつは、唇を樽の口のやうに優しく盛りあけて、

「まあ。よくござんちですわね。」と、自分で何日かかれに話したことを既う忘れてゐた。それきりでおなつとも會ふ機會がなかつた。

ふしぎに決つたやうに、カッフエなどで、まるまると肥えてゐた女は、ひとの妻君になつたりすると、春さきの雪のやうに細れてゆくのが普通である。つまりゴム玉のやうに肥えてた女がなぜさう痩せるかといふことについては、とくにカツレッツを食べないせいではないのである。ただ、卓テーブルと卓テーブルとの間をぐるぐる廻つてゐた蝶ど。にとつては、何よりもちやほやされることか肥る原因になつてもゐるらしかつた。それに歌みがいセンチメンタリズムが一朝にしてぶちコウされるために、みるかけもなく痩せ落ちるのであつた。



かれらは悲しいローレライの唄ひ手であり、長田幹彦氏の愛讀者であり、かつまた短歌の作者である所以のものである。月の光と桃色の封筒と、櫻色の五十銭札とモスリンの愛惜家であるからであつた。

「君も酔つばらひだ。おれも酔つばらひだ。」

などと、偶然によりあつまつた何何大學の文科生が、端なくも意氣投合して、杯をぶつつけ合つたりするときうつとりして卓子アイブにもたれて微笑むのが、彼女の何よりも美しいところを現はすところの立姿であつた。

文科生は、やがて誰でもするやうに、やや憂愁な口調で、

「君の目はいいね。うつとりしてゐて堪らなくいいね」と感嘆するのであるが、對手は對手でまた、

「その手つきがいい。指と指とのお互ひの圓みが柔で括つたやうなところは、どうも實にいい。」と、これまた、彼女の自信を温めるのである。さういふとき彼女らは、

それが見えすいたお世辭であることを知つてゐても、内内こころ嬉しく思はないものが居ないのである。

「たんと仰しやいまし。あたし、何もおごらないから。」

さう言ひながら彼女は、はばかりの立鏡にむかつて、さらに自分の縹緞を自分ではつきりと確かめるやうに眺め込むのであつた。

彼女らは、どういふ醜い女でも、みな月がすきであつた。月の美しい晩になると、みな窓ぎはへ出ては、

「まあ、いい月だこと。」と言つて、無限にセンチメンタルになるのであつた。

「ちよいと入らつしやい。まあ本當にいい月なんですよ。」と、飽くことなく眺め入るのである。さうするうち、彼女はいろいろな場面を考へ、しらすしらす束髪の前髪をわざと亂しておいて、何となく新刊雑誌の口繪のやうな憂愁な容貌を自分自身のなかに見出し、わざと蒼ざめたやうな悲しい顔つきをすることに依つて、彼女が

小説や繪畫に學び得た表情をみづからやつて見て楽しむのであつた。

間もなく彼女はきつと慍々やうに友だちをかへり見るのであつた。

「わたし悲しい顔をしてゐるでせう。」

と、なほ表情を悲しげに装ふのである。

「え。悲しさうよ。小説にでてくる女のやうよ。」

と、友だちも、すぐ相槌を打つて、自分もまたその前髪を亂すやうに手を上げるのであつた。

私はそれゆゑ、カッフエへ這入るごとに、カッフエの客が凡て多少に拘はらず、その面持に憂愁を浮べなければならぬこと、または、必らずテエブルに片肘ついて、何か考へ込んでゐなければならぬことを思ひつくのであつた。

或る晩、私はそのカッフエに坐つてゐるとき、れいの月の光をほめた雪子といふ女は、私のすぐ向ひの椅子にゐた文學青年らしい男に、かう話してゐるのを聞いた。

「髪をもちやもちやにしてゐた方がいいわ。きれに分けると見つともないわ。」と言ふと、その青年は、

「何故だい。」と言つた。

「だつてその方が顔にうつるんですもの。あなたは色が白いでせう。だから、かう黒い髪が顔に垂れてゐるとクツキリしてゐていいわ。」

と言つて、青年のあたまに櫛を入れて、すこし、もちやもちやに亂すのであつた。青年は撥つたさうにしてゐたがそれでも何等かの——多分、れいの官能的愉樂とでもいふ感覺に耽つてゐるものらしく、うやびやな浮いた顔つきで女のするままに委せてゐるのらしかつた。女は髪を亂しておいて、一と足ひき退がると、透して見て「よくうつるわ。これから然うなすつた方がどれだけいいか分らないわ。」と、自分ばかりでなく、人のことまで氣に煩ふらしかつた。なほ、二た足ばかり退つてじろじろ見つめながら、

「ほんとに彫刻的になつてよ。素的だわ。」と氣のいい雪子は自分のやうに嬉しげに囁くのであつた。

「なんだ、人の顔をおもちやだと思つてゐる——」と、青年は中ば戯談のやうに言つたが、自分でも、その方が餘程うつららしいと内内思つたのである。しかも正面の鏡にうつしたところは、どこか音楽家のやうで畫家みたいで、その上文學的憂愁を帯びてゐるらしく思はれるのであつた。

一度私にも彼女が帽子のかぶり方を教へたことがあつた。

「すこしおまだに冠るのよ。さうよ。さういふ風よ。」と言つた。「もつとへりの廣いのがいいわ。」と彼女は帽子をひねくり廻して言ふには、

「これ舶來なの。それとも和製——。」と、和製の製を甘へるやうに長くひいて言ふのであつた。

「和製だか何だか……。。」といふと、

「この間舶來のを見たわ。でも、どちらでもいいわね。形さへよければね。」と、舶來なれば舶來を讚めたたへる筈の彼女も、ときどき自分を托けて和製をひいきすることがあるのである。

「やつぱり帽子は黒がいいわね。」と最後に言つて、あたらしい客のあつらへを聞くとき、かの女はもう憂愁な氣持をすつかり打ちコッしてしまつて、帳場へゆくと、「カッ一打、コオヒイ一つ。」と、語尾を長く鮭のすぢ子のやうな聲で叫ぶのであつた。さうかと思ふと、あたらしい客の言さきから例のねばねばして團子餅のやうな顔を迂り落すやうに覗かせて、さて、

「此間は酔つてゐらしたわ。わたし、どうしやうかと思つてゐたわ。でも、いくら肩さきをもつてあけてもふらふらするんですもの。」と、小鳥のやうに囀り出すのであつた。男はちよいと氣まりわる氣にしたが、しかしそれは酔つて亂次だましのなかつたためではなく、かの女の團子餅のやうな重みと湯氣つてゐる圓顔とを何となく眩

しく感じたからであつた。

「酔つぱらつてね。どうして下宿へかへつたか分らなかつた位だよ。」と、男は言つてにやにやとするのである。

「まるで蒨蕪のやうだつたわ。」と、彼女はなほも語りつづけるのであつた。男はさういふときは大概、彼女にその晩與るべきチップをそのままに忘れてゐたことを思ひ出さなければならなかつたし、又自然思ひ出すやうに仕向けてもゐた。それゆゑ、男はきつと、むき出しに一圓紙幣のぼろぼろに手垢でまみれたのを彼女につかませ

て、

「すくないけれど此間のおれいに取つておいて呉れたまへ。」と低い聲でいふと、雪子はいつもの癖のやうになつてゐる赤らみをぼつと頬にうかせながら（あらわたし又あかくなつたわ。困るわ。）と心でつぶやきながら、しつとりと令嬢のやうな白い手つきと、軽い挨拶をしながら受けとるのであつた。

さういふとき、此のカップエの女給溜りになつてゐるクッションにならんだ女らは、一やいば貫ひの多い雪子がまたしても、今の今手に受けとつた紙幣をみると、

「一圓……。」と胸でつぶやいて、トンと胸を衝かれたやうな氣がするのであつた。同時に視線を外らして了ふのである。

彼女の紅と金糸とのガマ口は、反古籠のやうに亂れてゐるのが常であつた。貫ひから貫ひを整理する間もなく夜更けになることが多かつた。五十錢二十錢一圓三十錢五錢といふやうな數字が小さい頭をゆききして、すぐ計算ができない位であつた。それゆゑ、彼女はたえず最う夕方すぎると、

「五十錢置いて行つた方が二人、五錢が一人、二十錢が八人、それから一圓が一人、あ、さうさう五十錢がまだ一人……。」と考へてゐるうちに、あちこちで卓をトントン叩いて、

「いくらアー。」と西洋のことばのやうに叫ぶこゑがきこえると、彼女は「二十錢